HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サハリン朝鮮人研究の資料と研究史：露日韓英各言語の研究状況
Author(s)	ユリア, ディン; ヴェニアミン, テン／／訳; 中山, 大将／／監修
Citation	境界研究, 13, 141-178
Issue Date	2023-03-31
DOI	10.14943/jbr.13.141
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90304
Type	bulletin (article)
File Information	09.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[研究動向]

サハリン朝鮮人研究の資料と研究史

── 露日韓英各言語の研究状況 ──

ユリア・ディン
ヴェニアミン・テン（訳）
中 山 大 将（監修）

監修者解説

本稿は、サハリン州郷土博物館の学術編集部長ユリア・ディン(「ディン」が姓であり、「ディン・ユリア」という表記も見られる)が2015年にサハリンで出版した『サハリンの朝鮮人ディアスポラ』の第1章「資料と研究史(原題：Источники и Историография)」を、ヴェニアミン・テンが和訳し、中山大将が監修したものである。同書については、2020年に韓国語訳が出版されているほか、最終章にあたる第6章が天野尚樹と宋恵媛によって日本語に訳出されている。本稿では、「サハリン朝鮮人」含め訳語の選定にあたっては同論文を参照した。参考までに上記各文献の書誌情報を以下に示しておく。

Дин Юлия Ивановна, Корейская диаспора Сахалина: проблема репатриации и интеграция в советское и российское общество. Южно-Сахалинск: Сахалинская областная типография, 2015.

진 율리야 이바노브나(김종헌 옮김)『사할린의 한인 디아스포라 본국 귀환 문제 그리고 소비에트와 러시아 사회로의 통합』선인、2020년。

ユリア・ディン(天野尚樹、宋恵媛共訳)「21世紀のサハリン朝鮮人：適応過程の完了」『山形大学歴史・地理・人類学論集』23号、2022年(http://id.nii.ac.jp/1348/00004211/)。

同書は、日露戦争の講和条約であるポーツマス条約によるサハリン島南部の日本領化以降、様々な経緯で来島した朝鮮人移住者とその子孫たちのエスニック・コミュニティを朝鮮人ディアスポラとして分析している。日本や韓国でもサハリンの朝鮮人に関する研究が

DOI : 10.14943/jbr.13.141

蓄積されてきたことは本稿も示す通りである。しかし、それらの大部分が「残留朝鮮人」や「在外僑胞」という視点に限られていたことも確かである。同書の特徴のひとつとして、サハリン朝鮮人をソ連市民・ロシア国民としての側面からも論じていることが挙げられる。

同書全体の意義については、すでに前掲の天野・宋の共訳論文の「訳者解説」で充分に論じられているので、ここではその第1章を訳出した意義について述べておきたい。

第1章は、先行研究整理にあたる章であるが、今回あえて訳出した理由としては、何よりも、サハリンの朝鮮人の歴史研究は、ロシア語、日本語、韓国語、英語など様々な言語でなされているものの、それらを総覧するような先行研究整理は乏しいことが挙げられる。それは同時に、サハリンの朝鮮人が越境性を持つ主題でありながらも、研究者側の関心や手法により言語間交流が乏しいことも意味している。

たとえば、本稿でも日本の研究者として三木理史や中山大将の名が挙がっているが、これら研究者は主に日本語資料を用いてサハリンの朝鮮人の歴史研究を行ない、また主に日本語で研究成果を発表している。朝鮮人研究が専門であるわけではなく、地域としての日本領樺太の研究をする中で樺太社会の中に朝鮮人を位置づけていることも両者の研究の特徴であるが、こうした研究の成果どころか、そもそもその存在自体が非日本語圏では充分に知られていないのが現状であろう。本稿でディンが中山の英語論文を強調する背景には、ロシア語圏では日本における「樺太史」研究が充分に知られていないということがあると考えられる。しかし、それは裏返せば、日本語読者の多くは、三木や中山の研究が、言語を越えたサハリン朝鮮人史研究全体の中にどのように位置付けられるのかを知らずに来たということでもある。

第1章を訳出した本稿は、こうした言語的分断に架橋し言語を越えた学術交流の促進に貢献できるはずである。なお、原著刊行以後に刊行された関連研究については、本稿末尾の「監修者補足」に挙げておいた。

訳出にあたっていくつか配慮した点があるので、以下に記しておく。

原著では「サハリン朝鮮人史」と「サハリン朝鮮人ディアスポラ史」というふたつの表現が用いられているものの、意味上の違いから使い分けているわけではなく、文脈上「ディアスポラ」という性格を強調したい場合に後者の表現が用いられている。読者の混乱を避けるため、訳出にあたって、「サハリン朝鮮人ディアスポラ史」はすべて「サハリン朝鮮人史」に置き換えたものの、原著者が「ディアスポラ」という概念を用いて研究を行なっている点はご理解いただきたい。

日ソ戦後にソ連が南サハリンに設置した地方政府機関としてГражданское управлениеがある。これについては、「民政局」という定訳を用いた。1905年の領有から1945年の日ソ戦争までの日本がサハリン島南部で施政を行なっていた期間について、原著では、время японского правленияやпериод губернаторства Карафутоといった語が見られるが、これら

は一括して「日本統治期」と訳した。ただし、период существования Японской колониальной империи は「日帝植民地期」という訳語をあてた。これらは、朝鮮などの他地域についても同様である。

なお、日本統治期に対する「南サハリン」という表現については「樺太」という訳語に統一し、また、前出の天野・宋の訳にならい「千島列島」という訳語は用いずに「クリル諸島」に統一した。国名については、基本的に「ソ連」「ロシア」「韓国」「北朝鮮」「米国」といった一般的な呼称を用いた。

「引揚げ」「帰国」「帰還」などと訳せるロシア語については、1945年から1949年までのものを「引揚げ」、それ以降のものを「帰国」として訳した。韓国人の姓「李」「林」は、ロシア語・英語文献の場合は「リ」「リム」、韓国語文献の場合は「イ」「イム」と表記した。ロシア語で表記されていた朝鮮人・韓国人姓名は基本的に、名・姓の順で表記しているが、日本語や韓国語の文献において姓・名の順での表記が慣例化している人物については慣例に従った。また、朝鮮人・韓国人姓名のうち漢字表記がわかっているものは漢字表記を添えた。

ロシア語、韓国語および中国語の文献名については、原著名の後の〔　〕内にその翻訳を付した。韓国語・中国語の単語のうち、「韓人」「コリアン」など日本語として理解し得るものについては、その含意を考慮して別の単語に翻訳せず原文表記を基に漢字やカナで表記した。韓国人の人名の日本語読みなど、ロシア語読者には有益でも日本語読者には無意味な解説などは注を含め削除している。本文中の(　)は原著者による補足説明である。

原著の章末にあった聞き取り調査対象者一覧や文書館調査情報は、第1章を単独で読む際にはあまり意味をなさないので今回は訳出していない。

なお、匿名の査読者からも本稿が世に出るために必要不可欠な数多くの助言をいただいた。この場を借りて感謝の意を表しておきたい。

2022年2月に起きたロシアによるウクライナ侵攻が膨大なウクライナ国民避難民を生み出したことを世界は目撃してきたが、ウクライナ侵攻はサハリンの朝鮮人ディアスポラにも新たな局面を生み出そうとしている。同年9月に部分的動員令が発令されると、サハリン朝鮮人の中には、国外へ出ようという動きが現れ、州都ユジノサハリンスクの韓国総領事館には「同胞ビザ」の申請のためにサハリン朝鮮人が殺到しているという話も現地から聞こえてくる。こうした状況の中で、サハリン朝鮮人史の研究整理を行なった本稿は、新たな現代的意義を持つはずである。

はじめに

サハリン朝鮮人史の資料と研究史は記述言語を基準としておおまかに4つのグループに分類できる。ロシア語(ソ連／ロシア)、日本語、韓国語、英語のものである(筆者は本テーマに関するその他の言語の資料や研究を見つけることができなかった)。したがって、

その資料と研究史に基づく先行研究を示すために、本稿は次の4章から構成する。第1章はロシア語、第2章は日本語、第3章は韓国語、第4章は英語の資料、文献、先行研究である。国別に先行研究を整理することはやや難しい。なぜならば、朝鮮半島にルーツを持つ研究者の中には、日本あるいはロシアに滞在し日本語あるいはロシア語で研究を発表する者も多く、また、韓国人研究者が日本語あるいはロシア語で、日本人研究者が韓国語や英語、ロシア語で研究を発表することがあるからである。

1. ロシア語の資料と研究史

ロシア語で発表されたサハリン朝鮮人史の研究は、主にロシア語の資料と研究史に基づいている。まず、これらの研究ではロシア連邦国立文書館(ГАРФ: Государственный архив Российской Федерации)、ロシア国立社会・政治史文書館(РГАСПИ: Российский государственный архив социально-политической истории)、ロシア国立現代史文書館(РГАНИ: Российский государственный архив новейшей истории)、国立サハリン州歴史文書館(ГИАСО: Государственный исторический архив Сахалинской области)に保存されている資料が用いられている。ГАРФについては、1945年から1947年にかけての南サハリンとクリル諸島の民政局に関する文書が注目に値する。具体的には、サハリンの地方政府とモスクワの政府機関(外務省、閣僚会議など)との書簡、戦後初期の極東幹部との書簡である。

РГАСПИについては、ヴャチェスラフ・M. モロトフ外務大臣文庫にサハリン朝鮮人史に関する文書が収蔵されている。また、第二次世界大戦前後の日本と朝鮮半島の状況に関するコミンテルンとコミンフォルムの地方部局が収集整理した情報も当該文庫に保管されている。

РГАНИについては、1953年から1991年にかけてのソ連、韓国、日本の間の国際関係に関する文書が注目に値する。残念ながら、同時期の北朝鮮とソ連の国際関係に関する文書(韓国と日本との関係よりはるかに量と種類が豊富である)は、いまだにアクセスすることが不可能である。

サハリン朝鮮人史に関する大量の文書は、ユジノサハリンスクのГИАСОにある。これらの文書は、後述する正式に公刊された統計資料集に入らなかった未公刊の統計資料および、サハリンとクリル諸島で様々な時期に活動していた民政局やサハリン州内務管理局パスポート部、労働者移住組織募集部、サハリン州執行委員会教育部、ソ連共産党州委員会等の政府機関と組織によって作成された資料から構成されている。

サハリン朝鮮人史の研究にあたっては、上記の文書館の資料は優先的に参照すべき資料群である。まず、サハリン朝鮮人の生活の様々な領域を規定する法制度に関する公文書に言及しておく必要がある。具体的には、ソ連とロシア連邦の法律・規定[(1)]および国際連合

(1) Закон СССР от 01.12.1978 № 8497-IX «О гражданстве СССР». Статья 13 // Ведомости ВС СССР. № 49. С. 816

総会の世界人権宣言(1948年12月10日)[2]にかかわるサハリン朝鮮人の国籍の問題である。

ディアスポラの生活をめぐる問題を研究するにあたっては、統計データも必ず参照すべき資料である。こうしたデータは、様々な人口統計参考書[3]および政府の公式サイト[4]が提供する全ソ連国勢調査(1959年、1970年、1979年、1989年)と全ロシア国勢調査(2002年、2010年)から閲覧できる。

資料集は、研究者にとって大きな助けになっている。アナトーリー・T. クージン[5]、ニコライ・F. ブガイとシム・ホンヨング[6]の出版物をここでは取り上げたい。一つ目は、サ

〔1978年12月1日付の№ 8497-IX「ソ連の国籍について」ソ連法の第13条『ソビエト連邦最高会議官報』49号、816頁)；Закон СССР от 23.05.1990 № 1518-1 «О гражданстве СССР». Статья 16 // Ведомости СНД и ВС СССР. 1990. № 23. С. 435〔1990年5月23日付の№ 1518-1「ソ連の国籍について」ソ連法の第16条『ソビエト連邦人民代議員大会及び最高会議官報』23号、1990年、435頁)；Закон РФ от 28.11.1991 № 1948-1 «О гражданстве Российской Федерации». Статья 17 // Ведомости СНД и ВС СССР. 1992. № 6. С. 243〔1991年11月28日付の№ 1948-1「ロシア連邦の国籍について」ロシア法の第17条『ロシア連邦人民代議員大会及び最高会議官報』6号、1992年、243頁)；Закон РФ от 17.06.1993 № 5206-1 «О внесении изменений и дополнений в Закон РСФСР «о гражданстве РСФСР»». Статья 17 // Ведомости СНД и ВС РФ. 1993. № 29. С. 1112〔1993年6月17日付の№ 5206-1「「ロシア・ソビエト連邦社会主義共和国の国籍について」の修正と付加」のロシア法の第17条『ロシア連邦人民代議員大会及び最高会議官報』29号、1993年、1112頁)；Федеральный закон от 31.05.2002 № 62-ФЗ «О гражданстве Российской Федерации». Статья 12 // Ведомости СНД и ВС РФ. 1992. № 6. С. 243〔2002年5月31日付の№ 62-ФЗ「ロシア連邦の国籍について」連邦法の第12条『ロシア連邦人民代議員大会及び最高会議官報』6号、1992年、243頁)；Постановление ГД ФС РФ от 17.10.2003 № 4485-III ГД о Федеральном законе о внесении изменений и дополнений в Федеральный закон «О гражданстве Российской Федерации». Статья 12 // Ведомости ВС РФ. 2003. № 30. С. 1584.〔2003年10月17日付の№ 4485-III「「ロシア連邦の国籍について」連邦法に国会院による修正と付加」ロシア連邦議会国家院の制定法の第12条『ロシア連邦議会官報』30号、2003年、1584頁)

(2)「世界人権宣言」(国際連合Webサイト)［http://www.un.org/ru/documents/decl_conv/declarations/declhr.shtml］2011年8月1日最終閲覧。

(3) 例えば、Сахалинская область на рубеже XXI века // Статистический ежегодник. Южно-Сахалинск: Госкомстат России, Сахалинский областной комитет государственной статистики, 2001. 321 с.〔「21世紀初めのサハリン州」『統計年報』ロシア国立統計委員会、サハリン州国立統計委員会、2001年、321頁〕；Сахалинская область: цифры и факты 2010–2011 гг. Южно-Сахалинск: Федеральная служба государственной статистики, Территориальный орган федеральной службы государственной статистики по Сахалинской области (Сахалинстат), 2012. 48 с.〔『サハリン州：2010–2011年の統計と事実』国立統計連邦管理局、サハリン州国立統計連邦管理局地方機関(サハリン統計)、2012年、48頁〕

(4) 例えば、「デモスコプWeekly」(ロシア国立研究大学経済高等学院人口学大学)、［http://demoscope.ru/weekly/2013/0559/index.php］2013年8月1日最終閲覧；「2002年の全ロシア国勢調査」［http://www.perepis2002.ru］2013年8月1日最終閲覧;「2010年の全ロシア国勢調査」［http://www.perepis-2010.ru］2013年8月1日最終閲覧。

(5) *Анатолий Т. Кузин*, Сахалинские корейцы: история и современность. Документы и материалы, 1880–2005. Южно-Сахалинск: Сахалинское областное книжное издание, 2006. 460 с.〔アナトーリー・T. クージン『サハリン朝鮮人：歴史と現代　1880–2005年の文書と史料』サハリン州文芸出版、2006年、460頁〕

(6) *Николай Ф. Бугай, Хон Ёнг Сим*, Общественные объединения корейцев России: конститутивность, эволюция, признание. М.: Новый хронограф, 2004. 370 с.〔ニコライ・F. ブガイ、シム・ホンヨング『ロシア朝鮮人協会：立憲性、進展、承認』ノヴィ・フロノグラフ、2004年、370頁〕

ハリン朝鮮人協会が出版した韓国語、日本語、ロシア語の資料集である[7]。本資料集には今まで明らかにされなかったサハリン朝鮮人史に焦点を当てた手紙や陳情書、その他様々な文書が収録されている。

サハリン朝鮮人史を解明する資料として回想記が重要な意義を有する。回想記の中でも、事態を直接目撃してきた朴亨柱[8]（原著は日本語で書かれ、後にロシア語に翻訳された。原著については後述。）の回想記は際立つ意義を持つ。そして元・民政局長官ドミートリー・N. クリューコフの回顧録[9]も大変貴重な資料である。彼の指導下で戦後の南サハリンとクリル諸島がソ連の政治・経済体制に統合されたからである。

サハリン朝鮮人史をさらに再構築するために、筆者はオーラル・ヒストリーの手法もとり、サハリン朝鮮人ディアスポラの三つの世代[10]を対象にインタビューを行っている。インタビューはサハリンと韓国で実施し、歴史的証言、すなわち、その人物が生きた人生の経験が反映された情報に着目した。

ソ連時代のほぼ全期間を通じてサハリン朝鮮人ディアスポラ問題の研究は、ほとんど自主規制されてきたが、それでもソビエト史学は一定の研究成果を蓄積し、その大部分は1970 ～ 80年代に公刊された。

ソ連時代にサハリン朝鮮人の歴史について言及した研究者は2人だけであった。リ・ベンデュは博士候補論文[11]において1905年から1945年にかけての日本統治期の樺太の朝鮮人に関する歴史的問題（移民の原因、日本政府の政策、居住条件）について分析を行った。本論文の一つの長所としては、日本語と朝鮮語の多様な文献を参照している点が挙げられ

(7) Сахалинская общественная организация дважды принудительно мобилизованных корейцев / Под ред. Дин Гир Со. Южно-Сахалинск: Идюн динен, 2001. 228 с.〔ソ・ディンギル編『二回も強制連行されたサハリン朝鮮人の協会』イデュン・ディネン、2001年、228頁〕

(8) Хён Чжу Пак, Репортаж с Сахалина. Южно-Сахалинск, ЗАО «Файн Дизайн», 2004. 167 с.〔朴亨柱『サハリンからのレポート』ファイン・デザイン、2004年、167頁〕

(9) *Дмитрий Н. Крюков*, Гражданское управление на Южном Сахалине и Курильских островах в 1945–1948 гг. // Краеведческий бюллетень. 1993. № 1. С. 3–44; № 2. С. 2–24; № 3. С. 3–40.〔ドミートリー・N. クリューコフ「南サハリンとクリル諸島の民政局（1945–1948年）」『郷土誌ビュレティン』1号、1993年、3–44頁；2号、2–24頁；3号、3–40頁〕

(10) サハリン朝鮮人ディアスポラ内部では世代別に明確な区分が存在する。一世はパスポート上の1945年8月15日以前に生まれた者であると定義されている。この定義をふまえると、一世の子供たちは二世になり、一世の孫たち、曾孫たちは三世、四世になる。もちろん、厳密に言えば、その区分は正確なものとは言えない。なぜなら、同じ「世代」の中にも年齢の差が20–30歳までの幅で存在しているからである。しかし、この区分はサハリン朝鮮人コミュニティ内部にも、国際的にも（サハリン朝鮮人一世のみが韓国帰国の権利を有する）使われているため、筆者は本稿においてもこの区分を用いることは合理的であると考える。

(11) *Бен Дю Ли*, Южный Сахалин и Курильские острова в годы японского господства: … канд. ист. наук. М., 1976. 177 с.〔リ・ベンデュ『日本統治下の南サハリンとクリル諸島』博士候補学位論文（歴史学）、モスクワ、1976年、177頁〕

る。ニコライ・I. コレスニコフは『労働者と農民と共に』(12)という専門書においてソ連の文書館所蔵文書に基づき、南サハリンがソ連の領土になった後に朝鮮人が住民として残されたことについて言及した。具体的には、コレスニコフは、1945年の時点でサハリンには4万7千人以上の朝鮮人が居住していたと主張している(後に分かるようにこの数値は事実と大きく乖離するものであった)。

1985年にペレストロイカとグラスノスチの時代が始まると、サハリン朝鮮人史研究が急速に増加する。多くの研究者の中でも、特に次の3人のロシア人研究者の研究が注意に値する。

一人目はボク・ジコウ(朴寿鎬)である。ボクはペレストロイカ期に『サハリンの朝鮮人』(13)を執筆し、1993年に専門書として出版した。ボクの業績は、サハリン朝鮮人史研究に大きな貢献を果たしたと言える。『サハリンの朝鮮人』において、ボクは朝鮮人の移動に関する日本語の学術的、一般向け双方の文献を分析し、サハリン朝鮮人コミュニティに属する人々の記憶を記録した。ボクも当事者であり、内部から状況を分析する視点は、紛れもなくボクの研究の特徴である。しかし、そうした強い当事者性はボクの研究にある種の主観性をもたらさざるをえない。そうではあっても、ボクの研究はロシア歴史学においてサハリン朝鮮人を対象に書かれた最初の学術専門書であった。また、その他の論文(14)においてボクは、日本およびロシアで研究上の関心となっていたサハリン朝鮮人史の諸問題を解明していた。

二人目は、ロシア歴史学におけるサハリン朝鮮人史研究の第一人者とされるアナトーリー・T. クージンである。クージンは学術論文の中で初めてサハリンの文書館の広範な資料を紹介した人物である。『極東朝鮮人：生涯と運命の悲劇』(15)という最初の著作はいまだにロシア国外のサハリン朝鮮人史研究においてもっとも参照されている文献である(日本語

(12) *Николай И. Колесников*, В одном строю с рабочими и крестьянами. Южно-Сахалинск, Сахалинское отделение Дальневосточного книжного издательства, 1974.120 с.〔ニコライ・I. コレスニコフ『労働者と農民と共に』極東文芸出版社サハリン部、1974年、120頁〕

(13) *Зи Коу Бок*, Корейцы на Сахалине. Южно-Сахалинск: Южно-Сахалинский государственный педагогический институт, Сахалинский центр документации новейшей истории, 1993. 222 с.〔ボク・ジコウ『サハリンの朝鮮人』ユジノサハリンスク国立教育大学、現代史サハリン情報センター、1993年、222頁〕

(14) *Зи Коу Бок*, К вопросу о «проблемах сахалинских корейцев» // Нам жизнь дана / сост. Дюн Мо Сун, Южно-Сахалинск: Дальневосточное книжное издательство. Сахалинское отделение, 1989. 111 с.〔ボク・ジコウ「「サハリン朝鮮人の問題」をめぐる問題について」スン・デュンモ編『我々にいのちが与えられた』極東文芸出版社サハリン部、1989年、111頁〕；*Бок*, Сахалинские корейцы: проблемы и перспективы. Южно-Сахалинск: ИМГиГ ДВО АН СССР, 1989. 77 с.〔同前『サハリン朝鮮人：問題と将来』ソ連科学アカデミー極東部海洋地質学・地球物理学大学、1989年、77頁〕

(15) *Анатолий Т. Кузин*, Дальневосточные корейцы: жизнь и трагедия судьбы. Южно-Сахалинск: Дальневосточное книжное издательство. Сахалинское отделение, Литературно-издательское объединение «Лик», 1993. 368 с.〔アナトーリー・T. クージン『極東朝鮮人：生涯と運命の悲劇』極東文芸出版社サハリン部、リック文学出版協会、1993年、386頁〕

版も出版されている[16])。この本の第2部は、現代朝鮮人ディアスポラに関するものである。クージンは2010年に自身の長年にわたるサハリン朝鮮人史研究の成果をまとめ『サハリン朝鮮人の歴史的運命』全3巻[17]として出版した。また、サハリン朝鮮人コミュニティの個別の問題に関する論文群も発表している[18]。クージンは、2012年に今までの研究成果

(16) アナートリー・T. クージン『沿海州・サハリン近い昔の話：翻弄された朝鮮人の歴史』凱風社、1998年、317頁。

(17) *Анатолий Т. Кузин*, Исторические судьбы сахалинских корейцев. В 3 кн. Кн.1. Иммиграция и депортация (вторая половина XIX в. - 1937). Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2009. 262 с.; Кн. 2. Интеграция и ассимиляция (1945–1990). Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2010. 336 с.; Кн. 3. Этническая консолидация на рубеже XX–XXI вв. Южно-Сахалинск: издательство «Лукоморье», 2010. 384 с.〔アナトーリー・T. クージン『サハリン朝鮮人の歴史的運命：移民と国外追放(19世紀後期–1937年)』(上巻)サハリン文芸出版、2009年、262頁；同前『サハリン朝鮮人の歴史的運命：統合と同化(1945–1990)』(中巻)サハリン文芸出版、2010年、336頁；同前『サハリン朝鮮人の歴史的運命：20世紀末の民族的結合』(下巻)ルコモリエ、2010年、384頁〕

(18) *Анатолий Т. Кузин*, Судьбы корейцев в аспекте исторического опыта освоения Сахалина и Курильских островов // Россия и островной мир Тихого океана. Выпуск I. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2009, С. 269–281〔アナトーリー・T. クージン「サハリンとクリル諸島開拓史からみる朝鮮人生涯」『ロシアと太平洋の島嶼的世界』1号、サハリン文芸出版、2009年、269–281頁〕；*Кузин*, История сахалинских корейцев как неисследованная актуальная научная проблема // Научные проблемы гуманитарных исследований. 2010. № 10. С. 30–37〔同前「サハリン朝鮮人史という未完成の現代的学術研究」『人文学研究の学術問題』10号、2010年、30–37頁〕；*Кузин*, Корейцы – бывшие японские подданные в послевоенной советской системе управления на Южном Сахалине (1945–1947 гг.) // Власть и управление на Востоке России. 2010. № 3. С. 95–101〔同前「戦後ソ連の南サハリン(1945–1947年)における旧日本臣民としての朝鮮人」『ロシア極東の政権と運営』3号、2010年、95–101頁〕；*Кузин*, Проблемы послевоенной репатриации японского и корейского населения Сахалина // Россия и АТР. 2010. № 2. С. 76–83〔同前「日本人と朝鮮人の戦後引き揚げ問題」『ロシアとアジア太平洋』2号、2010年、76–83頁〕；*Кузин*, Послевоенная вербовка северокорейских рабочих на промышленные предприятия Сахалинской области (1946–1960 гг.) // Россия и АТР. 2010. №3. С. 148–156〔同前「戦後サハリン産業のための北朝鮮人労働者募集(1946–1960年)」『ロシアとアジア太平洋』3号、2010年、148–156頁〕；*Кузин*, Сахалинские корейцы: из истории национальной школы (1925–2000) // Вестник Санкт-Петербургского университета. Серия 13. 2010. Выпуск 4. С. 3–8〔同前「サハリン朝鮮人：民族学校史の観点から(1925–2000)」『サンクトペテルブルク大学紀要』13号、2010年、3–8頁〕；*Кузин*, Трансформация гражданского статуса сахалинских корейцев // Власть. 2010. № 08. С. 75–78〔同前「サハリン朝鮮人の市民的身分の変遷」『権力』8号、2010年、75–78頁〕; *Кузин*, Переход корейцев в Дальневосточные пределы Российского государства (Поиски исследователя). Южно-Сахалинск, 2001. 64 с.〔同前『ロシア国家の極東地域への朝鮮人移動(試論)』ユジノサハリンスク、2001年、64頁〕；*Кузин*, Интеграция корейского населения в историко-географическое и социокультурное пространство Сахалинской области // IV Рыжковские чтения: материалы научно-практической конференции, 7–8 октября 2008 г. Южно-Сахалинск: Издательство «Лукоморье», 2009. С. 77–82〔同前「サハリン州という歴史、地理、社会、文化的空間への朝鮮人統合」『第4回ルイシコフ学術発表大会：資料集』2008年10月7–8日開催、ルコモリエ、2009年、77–82頁〕; *Кузин*, Корейская эмиграция на русский Дальний Восток и ее трагизм // Миграционные процессы в Восточной Азии. Международная конференция, 20–24 сентября 1994 г.: тезисы докладов и сообщений. Владивосток, 1994. С. 112–114〔同前「ロシア極東における朝鮮人亡命者とその悲劇」『東アジアの移民プロセス　国際大会(1994年9月20–24日)報告と発表の要旨』ウラジオストク、1994年、112–114頁〕; *Кузин*, Корейцы на Южном Сахалине // Великая Отечественная война: итоги и уроки. Всероссийская научная конференция, 21–22 апреля 2010 г. Владивосток, 2010. С. 40–47〔同前「南サハ

を体系的な形にまとめあげロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・民族誌学研究所から博士号[19]を授与された。

クージンはサハリン朝鮮人史を日本政府に置き去りにされた民族の歴史として捉え、サハリン朝鮮人コミュニティの現実的問題に対する回答を提起した。例えば、クージンは、1945年以降の朝鮮人の人口を示し、また、サハリン朝鮮人に対するソ連、ロシア連邦、日本、北朝鮮、韓国各政府の政策や偏見による権利侵害、明白な差別的事件を分析した最初の人物であった。そしてクージンは、北朝鮮人労働者の労働移民、民法的身分の問題、強制追放と移住、引揚げ問題、朝鮮人協会の活動、韓国と北朝鮮との関係などの様々な歴史的プロセスや現象を解明している。彼の業績はロシアだけでなく、ロシア国外でも高く評価されている。

三人目は、サハリン朝鮮人の歴史と民族誌の研究を行なったパク・スンイである。パクはサハリン朝鮮人の歴史と文化に関する著書(単著および共著)を刊行した[20]。

リンの朝鮮人」『大祖国戦争：結末と教訓』全ロシア学術大会、ウラジオストク(2010年4月21–22日)、2010年、40–47頁〕; *Кузин*, Выдворение // Особое мнение. 2007. № 53. С. 54–56〔同前「追放」『異論』53号、2007年、54–56頁〕; *Кузин*, Сахалинские корейцы // История и положение корейцев в России: материалы научно-практической конференции, посвященной 140-летию добровольного переселения корейцев в Россию, 13 августа 2004 г. Хабаровск, 2004. С. 61–72〔同前「サハリン朝鮮人」『ロシア朝鮮人の歴史と状況：朝鮮人のロシアへの自発的移住140周年を記念して』学術発表大会(2004年8月13日)、ハバロフスク、2004年、61–72頁〕; *Кузин*, Сахалинское корейское население: гражданско-правовые аспекты // III Рыжковские чтения: материалы краеведческой научно-практической конференции, 5–6 октября 2004. Южно-Сахалинск. Сахалинское книжное издательство, 2006. С. 95–101〔同前「サハリン朝鮮人人口：民法的側面を中心に」『第3回ルイシコフ郷土・学術発表大会：資料集』2004年10月5–6日、ユジノサハリンスク、サハリン文芸出版、2006年、95–101頁〕; *Кузин*, Сахалинские корейцы: международно-правовые аспекты // А.П. Чехов в историко-культурном пространстве Азиатско-Тихоокеанского региона: материалы международной научно-практической конференции, 21–30 сентября 2005 г. Южно-Сахалинск: Издательство «Лукоморье», 2006. С 155–159〔同前「サハリン朝鮮人：国際法的側面を中心に」『アジア太平洋という歴史文化空間とアントン・P. チェーホフ　学術発表国際大会(2005年9月21–30日、ユジノサハリンスク)』ルコモリエ、2006年、155–159頁〕; *Кузин*, Социально-демографические проблемы этнического меньшинства сахалинских корейцев на рубеже XX-XXI вв. // Сахалин и Курильские острова в истории России: материалы научно-практической конференции, 24 января 2012 г. Южно-Сахалинск, 2012. 340 с. С. 126–130.〔同前「20–21世紀の変わり目におけるサハリン朝鮮人という民族的マイノリティの社会・人口的問題」『ロシア史におけるサハリンとクリル諸島　学術発表大会の資料集(2012年1月24日)』ユジノサハリンスク、2012年、126–130頁〕

(19) *Анатолий Т. Кузин*, История корейского населения российского Сахалина (конец XIX – начало XXI вв.) дис. … д-ра ист. наук. Владивосток, 2012. 526 с.〔アナトーリー・T. クージン『ロシア・サハリンにおける朝鮮人住民の歴史(19世紀末–21世紀初期)』、博士学位論文(歴史学)、ウラジオストク、2012年、526頁〕

(20) *Сын Ы Пак*, Политические репрессии и депортация корейцев с Сахалина в 1930–1970–х гг. // Известия корееведения в Центральной Азии. 2010. № 9 (17). С. 55–67〔パク・スンイ「サハリンからの朝鮮人の政治的粛清と国外追放(1930–1970年代)」『中央アジアの韓国学会報』9号(17)、2010年、55–67頁〕; *Кузин*, Корейцы на Сахалине: до и после Чехова // А.П. Чехов в историко-культурном пространстве Азиатско-Тихоокеанского региона: материалы международной научно-практической конференции, 21–30 сентября 2005 г. Южно-Сахалинск: Лукоморье, 2006. С. 159–179〔同前「サハリンの朝鮮人　チェーホフの到来前後」『アジア太平

パクはサハリン朝鮮人の民族的儀礼[21]を記述し、引揚げ問題[22]にも着目して、彼ら／彼

洋という歴史文化空間とアントン・P. チェーホフ　学術発表国際大会資料集(2005年9月21–30日、ユジノサハリンスク)』ルコモリエ、2006年、159–179頁〕; *И.А. Толстокулаков, Сын Ы Пак*, Корейская диаспора на Сахалине: история формирования // Международная научная конференция «Россия и Корея в Северо-Восточной Азии в конце XIX – начале XX вв.». Владивосток, 24–25 августа 2009〔I. A. トルストクラコフ; パク・スンイ「サハリン朝鮮人ディアスポラ：形成史」「19世紀末~20世紀初期の北東アジアにおけるロシアと朝鮮」国際学術大会、ウラジオストク(2009年8月24–25日)、2009年〕; *Сын Ы Пак*, Политические репрессии и депортация корейцев с Сахалина в 1930–1970–х гг. // Вестник Сахалинского музея. 2014. № 21. С. 147–156〔パク・スンイ「サハリンからの朝鮮人の政治的粛清と国外追放(1930–1970年代)」『サハリン博物館会報』21号、2014年、147–156頁〕; *Е.А. Иконникова, Пак Сын Ы*, Писатели корейской диаспоры на Сахалине // Азия и Африка сегодня. 2009. № 7. С. 74–77〔E. A. イコンニコワ; パク・スンイ「サハリン朝鮮人ディアスポラの作家たち」『アジアとアフリカの現在』7号、2009年、74–77頁〕; *Сын Ы Пак*, А.П. Чехов и проблема ассимиляции иммигрантов (на материале произведений сахалинских корейцев) // IX Чеховские чтения: А.П. Чехов и проблемы нравственного здоровья общества. Южно-Сахалинск: издательство СахГУ, 2006. С. 53–58.〔パク・スンイ「アントン・P. チェーホフと移民者の同化問題　サハリン朝鮮人の作品を事例に」第9回チェーホフ大会、アントン・P. チェーホフと社会道徳の問題、サハリン国立大学出版、2006年、53–58頁〕

(21) *Сын Ы Пак*, А.П. Чехов и проблемы аккультурации в сфере питания сахалинских корейцев // X Чеховские чтения: «Ориентиры сахалинского чеховедения в панораме XXI в.» Южно-Сахалинск: издательство СахГУ, 2007. С. 55–61〔パク・スンイ「アントン・P. チェーホフとサハリン朝鮮人の食文化における文化変容の問題」21世紀パースペクティブの中のサハリン・チェーホフ学　第10回チェーホフ大会、サハリン国立大学出版、2007年、55–61 頁〕; *Пак*, Адаптационная эволюция обрядов жизненного цикла у сахалинских корейцев // Современные корееведческие исследования в Дальневосточном государственном университете. Выпуск 4. Владивосток: издательство Дальневосточного университета, 2006. С. 37–44〔同前「サハリン朝鮮人の冠婚葬祭の適応進化」『極東国立大学現代韓国学研究』4号、極東国立大学、2006年、37–44頁〕; *Пак*, К вопросу об этимологии и структуре собственных имен сахалинских корейцев // Материалы VI научно-методической сессии ЮСПК СахГУ: сборник научных статей. Южно-Сахалинск: издательство СахГУ, 2006. С. 107–112〔同前「サハリン朝鮮人の固有名詞の構造と語源の問題」『サハリン国立大学教育学カレッジ　第6回学術教育セッション資料　論文集』サハリン国立大学出版、2006年、107–112頁〕; *Пак*, Обряды жизненного цикла сахалинских корейцев: рождение ребенка, пэкиль, толь // Материалы XXXVII научно-практической конференции преподавателей, аспирантов и сотрудников СахГУ: сборник научных статей. Южно-Сахалинск: издательство СахГУ, 2006. С. 41–43〔同前「サハリン朝鮮人の冠婚葬祭：子供の誕生、ペクイル、トル」『第37回サハリン国立教員、院生、従業員学術発表大会資料　論文集』サハリン国立大学出版、2006年、41–43頁〕; *Пак*, Проблемы сыновней почтительности «хё» у сахалинской корейской диаспоры // Актуальные проблемы духовно-нравственного воспитания детей и молодёжи: материалы региональной научно-практической конференции, 25–26 мая 2006 г. Южно-Сахалинск, 2007. С. 63–67〔同前「サハリン朝鮮人ディアスポラの『孝』の問題」『若者と子供の精神・道徳教育の現代的諸問題　学術発表地方大会資料(2006年、5月25–26日、ユジノサハリンスク)』2007年、63–67頁〕; *Пак*, Сахалинская корейская семья: от традиционной к современной // Материалы II международной конференции «Феномен творческой личности в культуре». М.: издательство МГУ, 2006. С. 133–141.〔同前「サハリン朝鮮人家族：伝統的形態から現代的形態へ」『「文化における創造的人格の現象」第2回国際大会資料集』モスクワ国立大学、2006年、133–141頁〕

(22) *Сын Ы Пак*, Проблемы репатриации сахалинских корейцев на историческую родину // Сахалин и Курилы: история и современность: материалы региональной научно-практической конференции (27–28 марта 2007 г.). Южно-Сахалинск: издательство «Лукоморье», 2008. С. 277–287〔パク・スンイ「サハリン朝鮮人の故郷への引揚げ問題」『サハリンとクリル：過去と現在　学術発表地方大会資料(2007年3月27–28日、ユジノサハリ

女らのアイデンティティ[23]を研究している。一世であるパクは、サハリン朝鮮人史を分析し、当事者としてその内部の状況について論じている。

上記3人の研究者以外にも、サハリン朝鮮人史の個別的側面を研究する者や、上記3人と同様のテーマを研究する者もいる。

アレクサンドル・I. コスターノフとI. F. ポドゥルーブナヤは、1945–1963年までサハリン州に存在していた朝鮮学校について詳細な研究を出版した[24]。両者は文書館所蔵の文書に基づき、朝鮮人民族学校の形成、運営、廃止の歴史を調べ、朝鮮学校の運営に伴う教育人材不足や経済的問題、学校の廃止までに至るソ連政府の政策を分析した。

ポドゥルーブナヤは朝鮮人史の研究を続け、論文「サハリンの朝鮮人人口の形成原因について」[25]を発表した。ポドゥルーブナヤは、同論文においてサハリンへの朝鮮人移民に対する見解を述べている。ただし、ポドゥルーブナヤは、サハリンの日本統治時代の文献を参照せず、主にロシアの文書館の資料に依拠して研究を行なっている。

ラリーサ・V. ザブロフスカヤは、サハリン朝鮮人コミュニティに対する北朝鮮の政策[26]、

ンスク)』ルコモリエ、2008年、277–287頁〕；*Пак*, Репатриации сахалинских корейцев на родину: история и проблемы // Сахалинское информационное агентство. Режим доступа: http://siaa.ru/index.php?pg=1&id=127088&owner=1&page=4&ndat=&cd=012012&hd=3 (дата обращения: 08.07.2012)〔同前「サハリン朝鮮人の引揚げ：歴史と問題」(サハリン通信社Webサイト)、[http://siaa.ru/index.php?pg=1&id=127088&owner=1&page=4&ndat=&cd=012012&hd=3] 2012年7月8日最終閲覧〕；*Пак*, К вопросу о послевоенной ответственности Японии за судьбы сахалинских корейцев // Сборник трудов Второй международной научно-практической конференции «Уроки истории. Вторая мировая война и история России и мира XX–XXI вв.». СПб: издательство Политехнического университета, 2009. С. 89–90.〔同前「サハリン朝鮮人の生涯に対する日本の戦後責任」『「歴史の教訓　第二次世界大戦及び20–21世紀のロシアと世界の歴史」第2回国際学術発表大会　論文集』サンクトペテルブルグ工科大学出版、2009年、89–90頁〕

(23) *Сын Ы Пак*, Проблемы идентификации сахалинской корейской молодежи // «Мозаика культур»: теория и практика поликультурного диалога в Азиатско-Тихоокеанском интеграционном поле: материалы международной научно-практической конференции (20–25 марта 2009 г.). Южно-Сахалинск: издательство СОИПиПКК, 2009. С. 39–41.〔パク・スンイ「サハリン朝鮮人若者のアイデンティティ問題」『「文化のモザイク」　アジア太平洋統合エリアにおける多文化対話の理論と実践　国際学術発表大会資料(2009年3月20–25日、ユジノサハリンスク)』再訓練・高度人材訓練サハリン州大学出版、2009年、39–41頁〕

(24) *Александр И. Костанов, И.Ф. Подлубная*, Корейские школы на Сахалине: исторический опыт и современность. Южно-Сахалинск: Архивный отдел администрации Сахалинской области, Сахалинский центр документации новейшей истории, 1994. 24 с.〔アレクサンドル・I. コスターノフ、I. F. ポドゥルーブナヤ　『サハリンの朝鮮学校：歴史的経験と現在』サハリン州政府文書部、サハリン現代史文書センター、1994年、24頁〕

(25) *И.Ф. Подлубная*, Источники формирования корейского населения на Сахалине // Миграционные процессы в Восточной Азии: тезисы докладов и сообщений международной конференции 20–24 сентября 1994 г. Владивосток, 1994. С. 115–117.〔I. F. ポドゥルーブナヤ「サハリンの朝鮮人口の形成原因」『東アジアの移民プロセス　国際大会　発表・報告要旨(1994年9月20–24日、ウラジオストク)』1994年、115–117頁〕

(26) *Лариса В. Забровская*, Россия и КНДР: опыт прошлого и перспективы будущего (1990–е гг.). Владивосток: изд-во Дальневост. ун-та, 1998. 116 с.〔ラリーサ・V. ザブロフスカヤ『ロシアと朝鮮民主主義人民共和国：過去の経験と未来のパースペクティブ(1990年代)』極東国立大学出版、1998年、116頁〕

1940年代の北朝鮮からサハリンへの労働移民送出プロセス[27]、現代におけるサハリン朝鮮人と北朝鮮および韓国との交流[28]を研究している。

イリーナ・B. キムは、論文「サハリン朝鮮人」[29]においてサハリン朝鮮人の民族誌的情報収集、サハリン州郷土博物館(ユジノサハリンスク市)のコレクション収集の問題について論じた。ガリーナ・I. ドゥーダレツは日本統治期の日本語公文書(朝鮮人に関するもの含む)の概観と分析を行った[30]。

リュドミラ・I. ミッソノワは、サハリン住民(朝鮮人はその一部である)の民族的アイデンティティに関する膨大な民族誌的調査を実施し論文として発表した[31]。同論文でミッソノワは、サハリン朝鮮人に朝鮮半島南部出身が多いという特徴や都市部への偏在(具体的には、朝鮮人人口の半分以上が州都に住んでいること)に着目した。

朝鮮人住民が日本人ナショナリストに虐殺された1945年の瑞穂(ポジャルスコエ[32])事件、上敷香(レオニードヴォ)事件に関する文献として、以下の二つの書籍を挙げることができる。ひとつは、コンスタンチン・ガポネンコの『瑞穂村の悲劇』[33]で、もうひとつは、ウラジーミル・グリーニの『生涯という時間との別れ』[34]である。両書は中編小説として執

(27) *Лариса В. Забровская*, Трудовая миграция из КНДР в Россию (середина 1940–х – 2003 гг.) // Проблемы Дальнего Востока. 2005. № 5. С. 62–72.〔ラリーサ・V. ザブロフスカヤ「朝鮮民主主義人民共和国からロシアへの労働移民プロセス(1940年中期–2003年)」『極東の諸問題』5号、2005年、62–72頁〕

(28) *Лариса В. Забровская*, Власти КНДР и РК в борьбе за симпатии сахалинских корейцев (1990–е гг.) // Китай и АТР на пороге XXI века: тезисы докладов IX международной научной конференции. Ч. 1. М., 1998. С. 185–188〔ラリーサ・V. ザブロフスカヤ「サハリン朝鮮人の共感のため　朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国両政府の競争(1990年代)」『21世紀に近づく中国とアジア太平洋　第9回学術大会発表要旨(第1巻)』1998年、185–188頁〕; *Забровская*, Российские корейцы и их связи с родиной предков (1990–2003 гг.) // Проблемы Дальнего Востока. 2003. № 5. С. 39–50.〔「ロシア朝鮮人と先祖・故郷とのつながり(1990–2003年)」『極東の諸問題』5号、2003年、39–50頁〕

(29) *Ирина Б. Ким*, Сахалинские корейцы // Проблемы сахалинского краеведения: тезисы выступлений на краеведческой конференции 18 мая 1988 г. Южно-Сахалинск, 1988. 61 с.〔イリーナ・B. キム「サハリン朝鮮人」『サハリン郷土史の諸問題　郷土史大会発表要旨(1988年5月18日、ユジノサハリンスク)』1988年、61頁〕

(30) *Галина И. Дударец*, Обзор японских фондов государственного архива Сахалинской области // Краеведческий бюллетень. 1995. № 2. С. 188–192.〔ガリーナ・I. ドゥーダレツ「サハリン州国立文書館における日本アーカイブの概観」『郷土誌ビュレティン』2号、1995年、188–192頁〕

(31) *Людмира И. Миссонова*, Этническая идентификация населения Сахалина: от переписи А.П. Чехова 1890 года до переписей XXI века // Исследования по прикладной и неотложной этнологии. М.: ИЭА РАН, 2010. Вып. 223. 88 с.〔リュドミラ・I. ミッソノワ「サハリン住民の民族的アイデンティティ　アントン・P. チェーホフによる1980年度の国勢調査から21世紀の国勢調査へ」『応用とアクチュアルな民族学研究』ロシア科学アカデミー民族・人類学大学、223号、2010年、88頁〕

(32) 以降、当時の時点での地名を表記する。現在の地名を示す場合には(　)に記す。

(33) *Константин Гапоненко*, Трагедия деревни Мидзухо. Южно-Сахалинск: Риф, 1992. 134 с.〔コンスタンチン・ガポネンコ『瑞穂村の悲劇』リフ、1992年、134頁〕

(34) *Владимир Гринь*, Разлука длиною в жизнь… Южно-Сахалинск: издательство «Лукоморье», 2010. 76 с.〔ウラジーミル・グリーニ『生涯にわたる別れ』ルコモリエ、2010年、76頁〕

筆されたため、学術的歴史研究とは言えないものの、犯罪捜査局の報告書に基づき、サハリン朝鮮人ディアスポラの最も暗い歴史を解明した。ガポネンコの著作は、韓国語に翻訳された。グリーニの著作は、韓国語に加え日本語にも翻訳され、露・韓・日3言語のテクストが同書に収録されている。

ユーリー・Y. アーリンの論文は量は少ないが、非常に有益なものである。なぜならば、樺太の炭鉱で労働に従事していたサハリン朝鮮人の貯金に対する日本の銀行の未払い問題に着目しているからである。同論文では著者が本問題の解決可能性に対して見解を述べている(35)。

インガ・A. ツペンコワ「忘却された劇場」(36)は、朝鮮人劇場の短い歴史について論じている。本研究は、サハリン文書館の資料だけでなく劇場の立案者と従業員の回想にも基づいている。

有名なカザフスタンの学者ゲルマン・N. キムは、包括的な学術論文の形でサハリン朝鮮人移民史を論じた。キムは『コリアン移民史』全2巻(37)において、移民、年齢、ジェンダー、社会的地位、北朝鮮や韓国との交流などのサハリン朝鮮人ディアスポラに関わる諸問題に焦点を当てている。他の論文や記事(38)においてもキムは、日本統治期の樺太への移住、第二次世界大戦後の北朝鮮からの労働者募集、朝鮮半島への引揚げ事業等について言及している。キムの研究は、国勢調査、ボク・ジコウ、ジョン・ステファン、リ・ベンデュ、アナトーリー・T. クージンの研究成果に基づいている。また、キムは、戦後にサハリンに残されたサハリン朝鮮人と中央アジアから組織的募集により派遣された高麗人(コリョサラム)との対立について詳しく論じている。

インナ・P. キムは、博士候補論文において戦後の状況および1945年から1949年にかけてソ連政府が直面した南サハリンからの朝鮮人引揚げ問題について多少の目配りをしてい

(35) *Юрий Ю. Алин*, Получат ли сахалинские корейцы свои вклады? // Южно-Сахалинск. 2000. 18 октября. С. 5〔ユーリー・Y. アーリン「サハリン朝鮮人は銀行貯金をもらえるか」『南サハリン』2000年10月18日、5頁〕

(36) *Инга А. Цупенкова*, Забытый театр (Из истории Сахалинского корейского драматического театра. 1948–1959 гг.) // Вестник Сахалинского музея. 1997. № 4. С. 207–213.〔インガ・A. ツペンコワ「忘却された劇場：サハリン朝鮮人劇場の歴史(1948–1959)」『サハリン博物館会報』4号、1997年、207–213頁〕

(37) *Герман Н. Ким*, История иммиграции корейцев. Кн. 1 Вторая половина XIX в. – 1945 г. Алматы: Дайк-пресс, 1999. 424 с.; *Ким*, История иммиграции корейцев. Кн. 2. 1945–2000 годы. Ч. 1. Алматы: Дайк-пресс, 2006. 428 с.; Ч. 2. Алматы: Дайк-пресс, 2006. 396 с.〔ゲルマン・N. キム『コリアン移民史：19世紀後半–1945』ダイク＝プレス、1999年、424頁；同前『コリアン移民史：1945–2000年代』(上巻)ダイク＝プレス、2006年、428頁；同前『コリアン移民史：1945–2000年代』(下巻)ダイク＝プレス、2006年、396頁〕

(38) *Герман Н. Ким*, Корейцы на Сахалине // Сервер «Заграница»: http://world.lib.ru/k/kim_o_i/aws.shtml (дата обращения: 04.02.2011)〔ゲルマン・N. キム「サハリンの朝鮮人」(ザグラニツァ Webサイト)、[http://world.lib.ru/k/kim_o_i/aws.shtml] 2011年2月4日最終閲覧〕；*Ким*, Распад СССР и постсоветские корейцы // Сервер «Заграница»: http://world.lib.ru/k/kim_o_i/aws.shtml (дата обращения: 04.02.2011).〔同前「ソ連崩壊とポストソ連のコリアン」(ザグラニツァ Webサイト)、[http://world.lib.ru/k/kim_o_i/aws.shtml] 2011年2月4日最終閲覧〕

る[39]。

論文集『北東アジアにおけるシベリアと朝鮮半島』では、サハリン朝鮮人史についても論じられている。具体的には、社会適応の問題に関するイゴリ・A. ヘガイの論文[40]、および1945年の日ソ戦争に従軍した朝鮮人とその引揚げ問題に関するセルゲイ・I. クズネツォフの論文[41]を挙げることができる。

論文集『現代日本』に収録された多数の論文の中で、マリーナ・G. ブラーヴィンツェワの論文は、日本統治期とその前後のサハリン朝鮮人の問題についても言及している。具体的に言えば、朝鮮学校の未設置や国籍・家族離散の問題である[42]。

ミハイル・S. ヴィソーコフは、サハリン朝鮮人の引揚げ問題を分析する論文を執筆している[43]。ヴィソーコフは、他の国、特にドイツとイスラエルで、引揚げ事業が実施された経験があることを指摘し、サハリン朝鮮人の経験も国際的に参照できる可能性があると論じた。

エレーナ・N. チェルノルツカヤは、ソ連極東の移民の包摂的研究を行い、1940年代末から1950年代までのサハリン朝鮮人の労働と生活の整備に関する論文を発表した[44]。アンドレイ・A. ベロノーゴフは、博士候補学位論文において朝鮮人ディアスポラの政治・法

(39) *Инна П. Ким*, Политическое, социально-экономическое и демографическое развитие территорий, присоединенных к Российской Федерации после завершения Второй мировой войны (Восточная Пруссия, Южный Сахалин, Курильские острова). 1945 – первая половина 1949 г.: дис. … канд. ист. наук. Южно-Сахалинск, 2010. 255 с.〔インナ・P. キム『第二次世界大戦後のロシアの東プロイセン、南サハリン、クリル諸島の発展：政治、社会経済、人口』博士候補学位論文(歴史学)、ユジノサハリンスク、2010年、255頁〕

(40) *Игорь А. Хегай*, Корейцы России: история и современность // Сибирь и Корея в Северо-Восточной Азии: сборник научных статей. Иркутск, 2004. С. 21–25.〔イゴリ・A. ヘガイ「ロシアの朝鮮人　過去と現在」『北東アジアにおけるシベリアと朝鮮半島　論文集』2004年、21–25頁〕

(41) *Сергей И. Кузнецов*, Корейцы в Советско-японской войне 1945 г. и проблема репатриации // Сибирь и Корея в Северо-Восточной Азии: сборник научных статей. Иркутск, 2004. С. 51–52.〔セルゲイ・I. クズネツォフ「1945年の日ソ戦争の朝鮮人従軍と引揚げ問題」『北東アジアにおけるシベリアと朝鮮半島　論文集』2004年、51–52頁〕

(42) *Марина Г. Булавинцева*, Сахалин – Карафуто: история границы сквозь ценность образования // Япония наших дней. 2010. № 3 (5). М.: ИДВ РАН, 2010. С. 89–98.〔マリーナ・G. ブラーヴィンツェワ「サハリンと樺太：教育観からみる境界史」『現代日本』3号(5)、ロシア科学アカデミー極東研究所、2010年、89–98頁〕

(43) *Михаил С. Высоков*, Перспективы решения проблемы репатриации сахалинских корейцев в свете опыта Израиля, Германии и других стран // Краеведческий бюллетень. 1999. № 2. С. 94–102.〔ミハイル・S. ヴィソーコフ「イスラエル、ドイツとその他の経験からみるサハリン朝鮮人の引揚げ問題の解決可能性について」『郷土誌ビュレティン』2号、1999年、94–102頁〕

(44) *Елена Н. Чернолуцкая*, Трудовое и бытовое устройство корейцев на Сахалине в конце 1940–х – начале 1950–х годов // Вестник Центра корееведческих исследований ДВГУ. Спецвыпуск: материалы II международной научной конференции. Владивосток, 2004. № 1. С. 117–125.〔エレーナ・N. チェルノルツカヤ「1940年代末–1950年代のサハリン朝鮮人の労働と生活の準備計画について」『極東国立大学韓国学研究センター会報　特集：第2回国際学術大会資料集』1号、2004年、117–125頁〕

的地位に関する文献を調査しまとめた[45]。ヴィクトル・V. シェグローフは、戦後サハリンとクリル諸島の移民プロセスを研究し、サハリンとクリル諸島への朝鮮人移住の問題について言及している[46]。

有名な朝鮮半島専門家であるアンドレイ・N. ランコフによる「サハリン朝鮮人」の記事[47]は、興味深い。ランコフ自身は、記事に深い学術的意義を求めていないものの、非常に重要な事実に着目している。具体的には、サハリン朝鮮人コミュニティにおけるソウル方言の維持、サハリン朝鮮人の若者が韓国との多様な交流の可能性を持っているにもかかわらず韓国へ帰国移住する動機を持たないことなどである。ランコフは、サハリンの旅を終えた後でサハリン朝鮮人について深く論じる英語論文を発表している。

ソ連・ロシアの民族史研究で有名な学者ニコライ・F. ブガイは、ソ連とCISの朝鮮人史の一部としてサハリン朝鮮人史を捉えている。ブガイは『ロシア連邦の朝鮮人と「太陽政策」』[48]『ロシア連邦の朝鮮人：歴史の新しい転回』[49]において、ロシアと韓国の外交関係におけるサハリン朝鮮人一世の帰国事業の過程を分析した。

『サハリン博物館会報』の雑誌に発表されたリム・ソンスク（林聖淑）の論文は重要な意義を持つ。なぜなら、本論文においてリムは韓国へ帰国したサハリン朝鮮人を対象にフィールド調査を行い、彼ら／彼女らの心情を分析したからである。リムはサハリン朝鮮人のアイデンティティに関連する複雑な問題があることを指摘し、その問題に関するさらなる研究が求められると論じた[50]。

ヴィターリー・S. チャンは韓国に住んでいる親戚を訪問し、その旅に関する報告を執筆

(45) *Андрей А. Белоногов*, К вопросу об историографии политико-правового положения корейской диаспоры на российском Дальнем Востоке (вторая половина XIX – конец XX вв.) // Вопросы гуманитарных наук. 2009. № 4. С. 51–55.〔アンドレイ・A. ベロノーゴフ「ロシア極東における朝鮮人ディアスポラの政治・法的地位の史料編纂について（19世紀後半－20世紀末）」『人文学の諸問題』4号、2009年、51–55頁〕

(46) *Виктор В. Щеглов*, Переселение советских граждан на Южный Сахалин и Курильские острова в середине 40-х – начале 50-х гг. XX в. // Краеведческий бюллетень. 2000. № 4. С. 54–68.〔ヴィクトル・V. シェグローフ「南サハリンとクリル諸島へのソ連市民の移住（20世紀40年代中期–50年代初頭）」『郷土誌ビュレティン』4号、2000年、54–68頁〕

(47) *Андрей Н. Ланьков*, Корейцы Сахалина // Восточный портал. Режим доступа: http://lankov.oriental.ru/d113.shtml (дата обращения: 04.02.2011).〔アンドレイ・N. ランコフ「サハリン朝鮮人」（ヴォストチヌイ・ポルタルWebサイト）［http://lankov.oriental.ru/d113.shtml］2011年2月4日最終閲覧〕

(48) *Николай Ф. Бугай*, Российские корейцы и политика «солнечного тепла». М. Готика, 2002. 256 с.〔ニコライ・F. ブガイ『ロシア連邦の朝鮮人と「太陽政策」』』ゴチカ、2002年、256頁〕

(49) *Николай Ф. Бугай*, Российские корейцы: новый поворот истории, 90-е годы. М.: ООО «Торгово-издательский дом «Русское слово-РС», 2000. 112 с.〔ニコライ・F. ブガイ『ロシア連邦の朝鮮人：歴史の新しい回転（90年代）』』ルースコエ・スロヴォ（PC）出版、2000年、112頁〕

(50) *Сунг-Сук Лим*, Обсуждение значения «возвратной миграции» среди сахалинских корейцев // Вестник Сахалинского музея. 2011. № 18. С. 261–264.〔リム・ソンスク「サハリン朝鮮人の「逆移民」の意義をめぐる議論」『サハリン博物館会報』18号、2011年、261–264頁〕

した[51]。テャンは、帰国者の韓国生活について紹介し、彼ら／彼女らの韓国における安全感と安定感について言及している。他方では、言語の問題をはじめ、就職の困難、親子別離、サハリンに対する郷愁などの帰国者が直面せざるを得ない諸問題にも言及している。

これらの問題については、ロシア以外の国で活動する研究者によってロシア語で発表された論文もある。筆者の考えでは、その中で最も重要な論文は、『郷土誌ビュレティン』に発表された日本人研究者・半谷史郎によるものである[52]。半谷は、РГАНИにあるサハリン朝鮮人に関するいくつかの文書を発掘して分析し、更にサハリン朝鮮人ディアスポラの問題をめぐる様々な観点を比較した。

もう一人の日本人研究者である宮本正明は、論文集『ロシアと太平洋諸島の世界』[53]の中でサハリン朝鮮人問題に関する日本の文献を考察し、日本の歴史学においてサハリン朝鮮人問題があまり研究されていないと結論づけた。

ロシアで研究活動を行っていた韓国人研究者もサハリン朝鮮人史に関心を持っていた。例えば、リ・ソンジェ[54]とロ・イェンドン[55]はサハリン朝鮮人の法的側面について考察した。両者ともサハリン朝鮮人の韓国国籍の取得問題が政府レベルでしか解決できない問題であると結論づけている。

韓国人研究者の論文の中では、学術誌『民族誌学評論』に掲載されたリ・クァンギュの論文[56]とユジノサハリンスク市で開催された国際学術大会で発表されたパク・チョンヒョの論文[57]が知られている。後者の論文では、ロシアの歴史学界では知られてなかった日本の

(51) *Виталий С. Тян*, Сахалинские корейцы в Южной Корее (Отчет о поездке в Республику Корея) // Вестник Сахалинского музея. 2011. № 18. С. 475–477.〔ヴィターリー・S. テャン「韓国にいるサハリン朝鮮人(韓国訪問報告)」『サハリン博物館会報』18号、2011年、475–477頁〕

(52) *Сиро Ханья*, Интеграция Сахалинских корейцев в советское общество в середине 50-х гг. XX столетия // Краеведческий бюллетень, 2005. № 4. С. 195–212.〔半谷史郎「1950年代中期のソ連社会へのサハリン朝鮮人統合」『郷土誌ビュレティン』4号、2005年、195–212頁〕

(53) *Масааки Миямото*, Японские исследования быта корейцев на Сахалине в период Карафуто // Россия и островной мир Тихого океана. Выпуск I. Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство, 2009. С. 261–268.〔宮本正明「樺太庁時代のサハリン朝鮮人生活に関する日本の研究」『ロシアと太平洋諸島の世界』(1号)サハリン文芸出版、2009年、261–268頁〕

(54) *Сонг Джэ Ли*, Вопросы гражданства в международном праве: дис. … канд. юрид. наук. М., 2002. 215 с.〔リ・ソンジェ『国際法における国籍の諸問題』博士候補学位論文(法学)、モスクワ、2002年、215頁〕

(55) *Ен Дон Ло*, Проблема российских корейцев. М.: издательство «Арго», 1995. 108 с.〔ロ・イェンドン『ロシア連邦の朝鮮人の問題』アルゴ出版、1995年、108頁〕

(56) *Квангю Ли*, Корейская диаспора в мировом контексте // Этнографическое обозрение. 1993. № 3. С. 27–39.〔リ・クァンギュ「世界的文脈におけるコリアン・ディアスポラ」『民族誌学評論』3号、1993年、27–39頁〕

(57) *Чон Хё Пак*, Сахалинская область и корейцы после окончания Второй мировой войны // Уроки Второй мировой войны и современность: материалы международной научно-практической конференции, посвященной 65-летию окончания Второй мировой войны, 2–3 сентября 2010 г. Южно-Сахалинск, 2011. С. 158–165.〔パク・チョンヒョ「第二次世界大戦後のサハリン州と朝鮮人」『第二次世界大戦の教訓と現在　第二次世界大戦後65年　国際学術発表大会資料(2010年9月2–3日、ユジノサハリンスク)』2011年、158–165頁〕

国立国会図書館所蔵の文書が用いられている。

サハリン朝鮮人史に関心を持つ読者にとって、本稿の筆者の諸論文も参考になるはずである。学術雑誌、学術大会資料集に載せられたあらゆる筆者論文は直接的・間接的に本テーマを論じている[58]。

2. 日本語の資料と研究史[59]

日本においては、公的立場にある者や著名人がサハリン朝鮮人ディアスポラの問題に関心を抱いてきた。在日コリアン作家である李恢成もその一例である。李恢成は、1935年にサハリンの真岡(ホルムスク)に生まれ、1946年に李一家は日本人名を名乗りソ連政府の許可を得て北海道へ引揚げた。李一家は、朝鮮半島まで引揚げることはできず、札幌に留まった。長い作家人生の中で、李は様々な文学賞を受賞している。例えば、1972年に『砧をうつ女』で芥川賞を受賞し、李は朝鮮半島出身者初の同賞受賞者となった。姉との悲劇のため(引揚げの際、姉が家族から離れてしまい、引揚船に乗れなかった)、李にとってサハリンは、作品の悲劇的なモチーフの一つになった。1975年に『私のサハリン』[60]を出版、

(58) *Юлия И. Дин*, Проблема репатриации Южного Сахалина (1945–1950 гг.) // Вопросы истории. 2013. № 8. С. 72–81〔ユリア・I. ディン「南サハリンの引き揚げ問題(1945–1950年)」『歴史の諸問題』8号、2013年、72–81頁〕; *Дин*, Общественное движение за репатриацию сахалинских корейцев на территории Японии и Южной Кореи (1945–1991 гг.) // Теория и практика общественного развития. 2013. № 9. С. 209–212〔同前「日本と韓国におけるサハリン朝鮮人の引揚げをめぐる社会運動(1945–1991年)」『社会的発展の理論と実践』9号、2013年、209–212頁〕; *Дин*, Миграция корейского этнического населения на Южный Сахалин в период японского правления (1905–1945 гг.) // Гуманитарные исследования в Восточной Сибири и на Дальнем Востоке. 2013. № 4 (24). С. 34–42〔同前「日本占領期の南サハリンへの朝鮮民族の移住(1905–1945年)」『東シベリアと極東の人文学研究』4号(24)、2013年、34–42頁〕; *Дин*, Корейская диаспора Сахалинской области: конфликты групп и столкновения идентичностей // Россия и АТР. 2013. № 4 (82). С. 5–14〔「サハリン州の朝鮮人ディアスポラ：グループの葛藤とアイデンティティの衝突」『ロシアとアジア太平洋』4号(82)、2013年、5–14頁〕; *Дин*, Этническая идентификация корейцев Сахалина // Вестник Центра корейского языка и культуры. 2014. № 15. С. 361–380〔同前「サハリン朝鮮人の民族的アイデンティティ」『韓国語・韓国文化センター会報』15号、2014年、361–380頁〕; *Дин*, Зарубежная историография истории корейцев Сахалина // Российская история XIX–XX вв.: Государство и общество. События и люди: сборник статей. СПб.: Лики России, 2013. С. 232–247〔同前「サハリン朝鮮人史に関する国外の研究史について」『19–20世紀のロシア歴史　国家と社会／出来事と人物　論文集』リーキ・ロシイ出版、2013年、232–247頁〕; *Дин*, Корейцы Сахалина в поисках идентичности (1945–1989 гг.) // Вестник РГГУ. Серия «Востоковедение. Африканистика». 2014. № 6 (128). С. 237–249〔同前「サハリン朝鮮人　アイデンティティを求めて」『ロシア国立人文学大学会報「東洋学／アフリカ学」シリーズ』6号(128)、2014年、237–249頁〕; *Дин*, Несостоявшееся изгнание: планы депортации корейцев Сахалинской области в контексте геополитики послевоенного периода // Клио. 2015. № 1 (97). С. 137–140.〔同前「生じなかった追放：戦後の地政学からみるサハリン州朝鮮人の国外追放計画」『クリオ』1号(97)、2015年、137–140頁〕

(59) 本章を書くにあたって、スヴェトラナ・パイチャゼ氏からお世話になった。ここでパイチャゼ氏に謝辞を述べる。

(60) 李恢成『私のサハリン』講談社、1975年。

1989年にはサハリンを訪問しサハリン朝鮮人に関する著作の中でその旅を描写した[61]。李の作品によって、日本国内で樺太朝鮮人史に目が向けられるようになった。

李はサハリン朝鮮人である朴亨柱に出会い、李は朴にサハリン朝鮮人として回想記を書くよう説得した[62]。同書は1990年に日本語で出版され、2004年にロシア語に翻訳された。学術的な価値が高いと言えないものの、朴の著作には文書館で見られないサハリン朝鮮人の日常生活に関する貴重な記録が残っている。

以上の資料以外にも、日本においてサハリン朝鮮人史に関する学術研究が数多くある。日本で最初に刊行された本問題に関する学術研究は、在日コリアンである朴慶植による『朝鮮人強制連行の記録』である[63]。帰国運動に積極的にかかわっていた朴は本論文において、日帝植民地期に起きた朝鮮人強制連行を証明できる重要な発言、文書、名簿を紹介した。本研究は朝鮮人から日本政府に対して訴訟を起こす過程で大きな役割を果たしたと言える。

朴の出版物は、日本人研究者の間で大きな反響を及ぼした。1974年には、この問題についてより本格的に言及した『朝鮮人強制連行強制労働の記録』[64]が刊行された。また、樺太を含めた戦時下の日本帝国における炭坑の朝鮮人労働に関する資料の発掘収集と歴史研究に力を入れた長澤秀は、樺太における朝鮮人強制連行に関して1986年に学術雑誌『在日朝鮮人史研究』に論文を発表[65]、1992年及び1996年には二つの資料集を出版[66]した。また長澤は常磐地域で強制連行された朝鮮人の名簿も資料集として出版した[67]。長澤は諸研究の中で樺太の各炭鉱における労働者数や管理者、日本の炭鉱内部を含め労働者の移動について詳細に論じている。樺太とクリル諸島の日本統治期におけるサハリン朝鮮人史問題の究明にあたって、長澤の研究の貢献は非常に大きい。

1985年には、法学者の大沼保昭が日本人戦犯を対象として1946年から1948年にかけて行われた東京裁判(ロシアでは「極東国際軍事裁判」として知られている)の文書に基づき、日本の戦後責任についての学術書を発表した[68]。また大沼は、日本で行われたサハリン残

(61) 李恢成『サハリンへの旅』講談社、1989年。

(62) 朴亨柱『サハリンからのレポート』御茶の水書房、1990年。

(63) 朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』未来社、1965年。

(64) 朝鮮人強制連行真相調査団編『朝鮮人強制連行強制労働の記録〈北海道・千島・樺太篇〉』現代史出版会、1974年。

(65) 長澤秀「戦時下南樺太の被強制連行朝鮮人炭礦夫について」『在日朝鮮人史研究』16号(10)、1986年、1–37頁。

(66) 長澤秀『戦時下朝鮮人中国人連合軍俘虜強制連行資料集：石炭統制会極秘文書 復刻版』全4巻、緑陰書房、1992年；同『戦時下強制連行極秘資料集』全4巻、緑陰書房、1996年。

(67) 長澤秀『戦時下常磐炭田の朝鮮人鉱夫殉職者名簿:1939.10~1946.1』長澤秀、1988年。

(68) 同書は最初に1985年に出版され、その後3度にわたり再出版された。大沼保昭『東京裁判から戦後責任の思想へ』有信堂高文社、1985年；同『東京裁判から戦後責任の思想へ』東信堂、1993年；同『東京裁判から戦後責任の思想へ』東信堂、1997年；同『東京裁判、戦争責任、戦後責任』(『東京裁判から戦後責任の思想へ』の改題)東信堂、2007年。

留朝鮮人運動のリーダーである朴魯学の人生と活動について著作を執筆し[69]、同書の韓国語訳は1993年に出版された[70]。

サハリン朝鮮人問題の知識蓄積については、日本の公的立場にある人々の貢献が大きかった。弁護士の高木健一は、積極的にサハリン朝鮮人の人権運動に関わり、1989年に日本政府の戦後責任を論じた書籍を出版した[71]。

「鉄のカーテン」の崩壊後、日本の歴史研究者は自由にサハリンを訪問するようになっただけでなく、サハリンの文書館にアクセスできるようにもなった(国立サハリン州歴史文書館に保存されている数多くの接収資料へのアクセスも含む)。1991年には、伊藤孝司が出版したサハリン朝鮮人史の写真・資料集が日本社会で大きな反響を呼び[72]、1997年には韓国語訳が出版された[73]。1992年には、林えいだい[74]が自身が発掘し収集した資料に基づく著作を刊行した。林は同書において戦時・戦後に日本人によって朝鮮人が虐殺された事件について説得力のある数多くの証拠を提示した。

サハリン朝鮮人の歴史研究の多様化の契機となったのは1994年に刊行された『サハリン残留韓国・朝鮮人問題と日本の政治：議員懇談会の七年』という資料集であった[75]。本資料集においてサハリン朝鮮人をめぐる7年間にわたる議員懇談会の記録が公開された。

1994年には角田房子の『悲しみの島サハリン：戦後責任の背景』が出版され、また1997年にはその文庫版が出版された[76]。角田は、日本人に棄てられた民族、朝鮮半島に帰る夢を抱いている人々の歴史について触れている。同書には50年間孤立させられたサハリン朝鮮人の歴史、故郷から遠く長く離れさせられた彼ら／彼女らの悲しみ、悲哀、感情などが描写されている。角田は、日韓関係の未来のためにサハリン朝鮮人に対する戦後責任を果たす必要が日本にはあると論じる。

また、日本には別の側面からサハリン朝鮮人史を考察している研究者がいる。例えば、戦前期の日本国内における朝鮮人の参政権問題に関する研究がある。参政権の観点から松田利彦[77]が詳細に研究を行ったものの、樺太の地方議会選挙に朝鮮民族が立候補した証拠

(69) 大沼保昭『サハリン棄民：戦後責任の点景』中央公論社、1992年。

(70) 오누마 야스아키『사하린에 버려진 사람들』서울: 정계연구소、1993년.〔大沼保昭『サハリンで棄られた人々』政界研究所、1993年〕

(71) 高木健一『サハリン残留韓国・朝鮮人問題：日本の戦後責任』大阪人権歴史資料館、1989年。

(72) 伊藤孝司『写真記録　樺太棄民：残された韓国・朝鮮人の証言』ほるぷ出版、1991年。

(73) 이토타카시『사하린 아리랑: 카레이스키의 증언』서울:눈빛、1997년.〔伊藤孝司『サハリンのアリラン：コリアンの証言』ヌンピット、1997年〕

(74) 林えいだい『証言・樺太(サハリン)朝鮮人虐殺事件』風媒社、1992年。

(75) サハリン残留韓国・朝鮮人問題議員懇談会編『サハリン残留韓国・朝鮮人問題と日本の政治：議員懇談会の七年』サハリン残留韓国・朝鮮人問題議員懇談会、1994年。

(76) 角田房子『悲しみの島サハリン：戦後責任の背景』新潮社、1994年；同『悲しみの島サハリン：戦後責任の背景』新潮社、1997年。

(77) 松田利彦『戦前期の在日朝鮮人と参政権』明石書店、1995年。

は見つけられず、当選者の存在についても関連情報を見つけられなかった。なお、2004年には本書の韓国語訳が出版されている[78]。

1997年には、新井佐和子の著作が出版された[79]。同書において新井は樺太で出版されていた『樺太日日新聞』の記事に基づき、樺太の地方議会に朝鮮人議員が存在していたことを明らかにした。

2001年に吉翔と片山通夫による日韓共著が出版された[80]。吉と片山はサハリンで実施されたインタビューに基づき、樺太への強制連行期から韓国帰国期までのサハリン朝鮮人史について記述している。吉と片山は、サハリン朝鮮人問題の未解決は日韓関係に悪影響を与えていると論じている。

さらに片山は、サハリン朝鮮人史に関心を持ち続け、その成果として『追跡！　あるサハリン朝鮮人残留朝鮮人の生涯』[81]を2010年に出版した。同書では、サハリン朝鮮人老年世代の一人であり、また帰国運動の重要なメンバーでもある鄭泰植(テン・テシク)の生涯が詳述されている。鄭は数奇な生涯を送った人物である。朝鮮に生まれ、父親に続いて樺太へ渡り、「二重徴用」の対象になった父親を待ち続け、日本から戻ってきた父親と再会し、ソ連統治下のサハリンでは朝鮮学校の講師や熟練の炭鉱夫として働き、同書刊行時には、サハリン朝鮮人に関する情報を収集し、その歴史を書いていた。鄭の生涯はサハリン朝鮮人史の複雑さを表していると言える。

2001年には、奈賀悟の著作が出版された。『日本と日本人に深い関係があるババ・ターニャの物語』[82]は前出の諸文献と同じくサハリンで収集した資料を中心に、あるサハリン朝鮮人女性の運命、また日本・ソ連時代のサハリンでの生涯が紹介されている。個人の経験と回想に基づく同書は、数万人のサハリン残留朝鮮人について、また彼ら／彼女らの故郷へ帰りたいという強い思いについて、また故郷に帰る夢を持ち命がけでボートに乗り海峡を渡った人々についても語られている。奈賀は、北海道鉱業史を研究している中で、サハリン朝鮮人問題に強い関心を持つようになったという。

日本統治期の歴史という枠組みからサハリン朝鮮人史を研究する第一人者の一人として三木理史を挙げることができる。三木は2003年に論文「戦間期樺太における朝鮮人社会の形成」[83]、2006年に『国境の植民地・樺太』[84]、2012年に専門書『移住型植民地樺太の形成』[85]

(78) 마츠다토시히코『일제시기 참정권문제와 조선인』서울: 국학자료원、2004년.〔松田利彦『日帝時期の参政権問題と朝鮮人』国学資料院、2004年〕

(79) 新井佐和子『サハリンの韓国人がなぜ帰れなかったのか』草思社、1997年。

(80) 片山通夫、吉翔『サハリン物語：苦難の人生をたどった朝鮮人たちの証言』リトルガリヴァー社、2001年。

(81) 片山通夫『追跡！あるサハリン残留朝鮮人の生涯』凱風社、2010年。

(82) 奈賀悟『日本と日本人に深い関係があるババ・ターニャの物語』文藝春秋、2001年。

(83) 三木理史「戦間期樺太における朝鮮人社会の形成」『社会経済史学』68巻5号、2003年、25–45頁。

(84) 三木理史『国境の植民地・樺太』塙書房、2006年。

(85) 三木理史『移住型植民地樺太の形成』塙書房、2012年。

を刊行した。

三木は、上記の著作において1905年から1920年にかけての植民地樺太、樺太への朝鮮人の移動と連行の過程、彼ら／彼女らの主な職業、賃金、労働と生活の条件について詳細に考察を行った。また三木は、人口構成、居住地域、労働市場における朝鮮人の位置に細心の注意を払って分析を行った。三木によれば、当時、日本政府は朝鮮半島住民に対して日本化政策を徹底していたにもかかわらず、樺太においては明確な日本化政策は採っておらず、樺太の朝鮮人に対する日本政府の方針にはある程度の無関心さと柔軟性が見られるという。日本帝国植民地システムにおける樺太の特殊な位置づけはその政策を規定した。植民地をはじめ他の地域と比べた場合、樺太の情況は北海道に近かった。

また三木の諸論文では、樺太の植民地形成において朝鮮人移住が果たした役割の重要性(特に強制連行)が指摘されている。移住型植民地の経営において、樺太庁は常に樺太への労働力供給事業を行うなど農業植民にたいへん苦労していた。樺太庁は、日本人労働力不足の問題を常に抱えていたが、人口的に僅少な樺太先住民を労働力として動員するよりも、外部からの移民の移住のほうが合理的であった。そこで、日本政府は朝鮮人を動員することとなり、彼ら／彼女らは炭鉱の仕事だけでなく、港湾労働や建築労働などに携わるようになった。

2007年には韓国人研究者・崔吉城の『樺太朝鮮人の悲劇』(86)が日本語で出版された(崔の研究に関しては、本稿第3章で詳述する)。2008年には工藤信彦(87)の著作が出版された。工藤は日本統治期という時間的枠組みの中で樺太に対する日本政府の政策の展開について詳しく論じた。

2010年以降、韓国出身で北海道大学の研究者である玄武岩はサハリン朝鮮人史に関する2つの研究を発表している。一つ目はサハリン朝鮮人問題をめぐる日韓交渉過程に関する論文であり(88)、二つ目はコリアン・ディアスポラに関する研究書である(89)。同論文において玄は、日韓両政府の交渉過程の資料に基づき、詳細な分析を行い、サハリン朝鮮人の引揚げ問題をめぐって韓国と北朝鮮との間に対立が存在していたことを指摘した。同論文が収録されている著書全体において玄は、サハリン朝鮮人ディアスポラを、朝鮮半島の外部の世界的コリアン・ディアスポラの一環として考察を行った。具体的には、日本、中国東北部、ロシアの極東とサハリンを対象にコリアン・ディアスポラの移動・定住及び自己同一化の様々な側面を研究している。特に、コリアン・ネットワーク形成に焦点を当てている。コリアンの在住地域の拡大、韓国語マスメディアの出現およびコミュニティの内部で

(86) 崔吉城『樺太朝鮮人の悲劇：サハリン朝鮮人の現在』第一書房、2007年。

(87) 工藤信彦『わが内なる樺太：外地であり内地であった「植民地」をめぐって』石風社、2008年。

(88) 玄武岩「サハリン残留韓国・朝鮮人の帰還をめぐる日韓の対応と認識：1950・70年代の交渉過程を中心に」『同時代史研究』3月、2010年、35–50頁。

(89) 玄武岩『コリアン・ネットワーク：メディア・移動の歴史と空間』北海道大学出版会、2013年。

歴史的母国のイメージを積極的に再構築しようとする動きが生まれた結果、そのネットワークが20世紀に創造されるようになったと玄は論じている。

今西一編『北東アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』という興味深い論文集が2012年に刊行された(90)。執筆者の天野尚樹、中山大将、三木理史、水谷清佳、石川亮太、玄武岩は、様々な観点からサハリン朝鮮人史を分析した。本論文集では以下のテーマが取り上げられている。第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期におけるサハリンでの朝鮮人社会形成、20世紀初頭の極東における朝鮮人商人の活動、ソ連施政下の朝鮮人、アイデンティティの模索、サハリン朝鮮人の日韓との交流である。また同論文集には、母国へ帰国し韓国に在住しているサハリン朝鮮人へのインタビューも収録されている。筆者も同論文集にサハリン朝鮮人の国籍問題についての論文を提供した(91)。

最新の研究のひとつとして、中山大将の研究書(博士論文の書籍化)[訳註]を挙げることができる。中山は朝鮮人がその一部分を構成していた樺太社会の形成過程を研究している。例えば、朝鮮学校の未設置や法的不平等、日本政府によるあまりにも入念ではない民族政策などにより、朝鮮人は構造的に樺太で差別を受けざるを得なかったことを指摘している。また、朝鮮半島では朝鮮人が1939年以降に創氏改名をさせられたのに対し、樺太ではそれ以前にすでに似たような状況が生まれていたという。その理由の一つとして、サハリン朝鮮人は閉鎖的コミュニティの中ではなく、日本人とともに生活する場合が多かったため、朝鮮人の多くは親から朝鮮語を聞かせられることがほとんどなかったので、朝鮮語を知らなかったことが挙げられる。差別が存在したにもかかわらず、中山によれば、朝鮮人(特に農業に携わった者)の中には裕福な者が少なくなかったという。例えば、朝鮮人である朴炳一は樺太の地方議員に選ばれたことさえあった。

3. 韓国語の資料と研究史

サハリンというテーマは多くの韓国人の中に特別な感情を呼び起こしている。サハリン朝鮮人史は今でも朝鮮民族の悲劇とされる国権剥奪期と関連づけられている。1910年8月22日の朝鮮併合で始まった日本植民地統治は1945年の第二次世界大戦の終結まで続いた。日本当局のために樺太の炭坑へ強制移送され、戦後の未解決問題として人質になったサハリン朝鮮人の歴史は学界をはじめ韓国社会(92)で大きな関心を集めてきた。

(90) 今西一編『東北アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』小樽商科大学出版会、2012年。

(91) ディン・ユリア「アイデンティティを求めて：サハリン朝鮮人の戦後、一九四五〜一九八九年」『東北アジアのコリアン・ディアスポラ：サハリン・樺太を中心に』小樽商科大学出版会、2012年、148–165頁。

[訳註] 中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成：周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』京都大学学術出版会、2014年。博士論文とは、中山大将『植民地樺太の農業拓殖および移民社会における特殊周縁的ナショナル・アイデンティティの研究』(京都大学大学院農学研究科、2010年)のことを指す。

(92) 筆者は韓国で韓国語の資料と研究史の調査をすることができたが、北朝鮮の史料等を調査することは北朝鮮の閉鎖性のために完全に不可能だった(文書館は閉じられており、さらに図書館に出入りすることも外

韓国ではサハリン朝鮮人史に関する史料が国家記録院(국가기록원)に所蔵されている。この十数年の間に、国家記録院の職員たちはサハリン朝鮮人史と関係のある文書と史料を収集し、その文書で構成された個別文書綴込みを作成した[93]。これによって、サハリン朝鮮人史研究が容易になったものの、収集された資料は極めて限定的である。

そのような事情にあっても、韓国では口述資料やフィールド調査、写真、新聞などサハリン朝鮮人史と関連のある資料が収録された研究成果が出版された。そうした研究成果物のひとつが『黒い大陸へ連れ去られた朝鮮人たち』という口述記録集である[94]。同記録集には韓国の研究者たちが集めたサハリン朝鮮人たちの口述資料が収録されている。インタビューに応じたサハリン朝鮮人はユ・ユヴォン(1916年生まれ)、イ・ムンテク(1923年生まれ)、ユン・テボン(1919年生まれ)、イム・スンジョ (1920年生まれ)、キム・ジョンソン(1921年生まれ)、ジョン・ファジャ (1925年生まれ)、ノ・サムスン(1938年生まれ)、ウ・ジョング(1934年生まれ)、カン・スンエ(1923年生まれ)などである。彼ら／彼女らの歴史はサハリン朝鮮人史の見取り図のようなもので、彼ら／彼女らの語りは20世紀のサハリンで起きた出来事についての鮮明な見取り図を提供してくれる。

この資料集にはサハリン朝鮮人史に関する非常に重要な資料が収録されている。すなわち、事件の当事者であるサハリン朝鮮人が直接作成して有名になった二つの日記のうちの一つ[95]である。資料集の編者たちは、保存された原本のスキャンデータの形で原文を掲載している。2013年には、パン・イルグォンが回顧録を学術的に加工し、注釈、図表、年表をつけ、よりアクセスしやすい形で刊行した[96]。この資料がロシア語で翻訳されれば、サハリン朝鮮人史はもちろん、サハリン全地域の歴史研究のために、大いに役立つことには疑いの余地が無い。

ジャーナリスト出身で韓国社会の中では、比較的早くからサハリン朝鮮人問題に関心を持っていたパク・ギョンソクの業績は資料的価値を有する。パクは、1957年から1959年にかけて帰国する日本人妻たちとともに日本に渡ったサハリン朝鮮人たちが日本から発送した手紙を刊行し[97]、帰国運動にも大きな役割を果たした。

国人には禁止されている)。ロシアの各図書館にもサハリン朝鮮人史に関する北朝鮮の出版物が所蔵されてない。従って、現時点では北朝鮮の研究者らによるこのテーマの研究状況を把握することはできない。

(93) 国家記録院、文書群 BA0881063, 文書綴込み 1260349-9999999-000019。

(94) 방일권책임편집『검은 대륙에 끌려간 조선인들・강제동원 구술기록집』서울:일제강점하강제동원피해진상규명위원회、2006년.〔パン・イルグォン編『黒い大陸へ連れ去られた朝鮮人たち・強制動員：口述記録集』日帝強占下強制動員被害真相究明委員会、2006年〕

(95) 前述の朴亨柱の回顧録は問題が発生し、長い時間が経過した後に執筆された。

(96) 춘게(류시욱)、방일권 옮김『오호츠크해의 바람』서울: 선인、2014년.〔チュンゲ(リュ・シウク)著、パン・イルグォン編『オホーツク海の風』ソンイン〕

(97) 박경석「적치하의 망향 30년」『신동아』제3집、1967년、170–178쪽〔パク・ギョンソク「敵地下の望郷30年」『新東亜』第3集、1967年、170–178頁〕;同前「사할린에서 온 편지」『신동아』제9집、1967년、248–252쪽.〔「サ

サハリン朝鮮人問題を扱った最初の韓国語の研究書は1972年に出版された。同書で著者のヒョン・ギュファンはソ連コリアン史を論じている[98]。同書の第5章「樺太朝鮮人の人生：過去とともに抑留された人々」においてサハリン朝鮮人問題を扱っている。また同書は、朝鮮人の引揚げが行われなかった原因としてイデオロギー的な対立に着目している。

「サハリン朝鮮人のために」というラジオ番組の司会者かつ編集者であるチャン・ミングは1972年4月からこの問題に取り組み始めた。チャンは1976年に編集局が受信したすべての手紙(口述と書信)を分類して分析し、論文[99]と著書[100]を執筆するための資料として利用した。チャンは、これらの研究成果によって1977年にソウルの東国大学校で修士号を授与された[101]。チャンは、この研究を通してサハリンの歴史、サハリン開発史、サハリンの支配権をめぐるロシアと日本の争いに言及し、そうした流れの中に朝鮮人移住などの問題を位置づけた。チャンは朝鮮人たちがサハリンに残留させられた状況および朝鮮半島の南部出身という事実(チャンの見解にしたがえば、朝鮮半島南部出身が約90%である)に特に関心を持った。チャンは、ソ連の政策、(主に韓国と日本で行なわれていた)帰国運動、市民権問題、サハリン朝鮮人ディアスポラに対する北朝鮮の政策、帰国問題とそれに対する日本政府の責任問題、共産主義イデオロギーの注入にもかかわらず母国への帰国を願う大多数のサハリン朝鮮人の心情などを研究した。チャンが行った研究に多くの長所があることは事実だが、やはり短所もある。すなわち、チャンは主に口述資料と個人資料(口述と書信)を利用しながらも、しばしば史料批判を欠いたため、研究上の正確性を失っている。例えば、チャンは1939年から1942年にかけて15万人の朝鮮人が樺太の工場と炭坑へ労働力を提供するために移住させられ、第二次世界大戦以降にサハリンに残る4万3千人の朝鮮人[102]のうち朝鮮半島南部生まれの人々は3万8千人(慶尚道が70%、忠清道が20%)であるとしている。充分な根拠が無いにもかかわらず、この数値は他の研究者たちによって引用され、また再引用もされてしまっている。

ハリンからきた手紙」『新東亜』第9集、1967年、248–252頁〕

(98) 현규환「재소한인의 사적 고찰」『교포정책자료』제13집、서울: 해외교포문제연구소、1972년、1–200쪽.〔ヒョン・ギュファン「在ソ韓人の史的考察」『同胞政策資料』第13集、海外同胞問題研究所、1972年、1–200頁〕

(99) 장민구「사할린의 한국인들」『북한』제56(8)집、1976년、243–253쪽.〔チャン・ミング「サハリンの韓国人たち」『北韓』第56(8)集、1976年、243–253頁〕

(100) 장민구『사할린에서 온 편지』서울: 한국방송공사、1976년.〔チャン・ミング『サハリンからきた手紙』ソウル：韓国放送公社、1976年〕

(101) 장민구『사할린(화태)억류동포실태에 관한 연구: 석사학위논문』서울: 동국대학교、1978년.〔チャン・ミング『サハリン(樺太)抑留同胞の実態に関する研究　修士学位論文』ソウル：東国大学校、1978年〕

(102) 筆者の考えでは、複数の研究で引用されることになった(特にボク・ジコウと一連の日本と韓国学者たちがこの数値を引用している) 4万3千名という1945年のサハリン朝鮮人の数値は朴魯学の証言に基づいたものである。朴が帰国した1958年に当時サハリン州に居住する朝鮮人は概ねその数値に達していた(1959年の人口調査では42,337名)が、この数値には1946年から1949年の間にサハリンに入国した約12,000名の北朝鮮労働者たちと充分に大きな規模になっていた朝鮮人の自然増分が含まれていたと考えられる。

韓国でのサハリン朝鮮人問題研究はソ連との外交関係に関する問題がほとんど論じられないという特徴を持っている。両国間の国交の不在は学術研究の基になる文書や資料へのアクセスを困難にした。この面では、韓国の学術界は長期間にわたり日本の書籍を翻訳し、日本の資料に基づいて研究するのに満足し、日本の学術界の陰にあった。ソ連と韓国が1990年に外交関係を樹立した後、韓国史学界ではサハリン朝鮮人史問題に対する関心が高まった。ロシアとの経済的・政治的協力、ロシアの資料と文献に対するアクセスの実現、そしてサハリン朝鮮人第一世代の母国帰国などがサハリン朝鮮人ディアスポラに対する学術的研究の背景となった。

1990年代初めに出た研究の中では、韓国の有名な研究者であるノ・ヨンドン(ロシアでは「ロ・イェンドン」として知られている)の諸論文を挙げることができる[(103)]。ノは主にサハリン朝鮮人たちの帰国と国籍問題というテーマに関心を寄せた。ノは、朝鮮人たちの帰国が実現されないことに対する日本政府の法的責任をサンフランシスコ講和条約の条項を根拠に日本政府が否定するのは違法であると考え、日本政府は(自身が認めている)道義的責任はもちろん、法的責任までも負わなければならず、サハリン朝鮮人たちに相当な額の賠償金を支払うべき義務があるという事実を証明している。ノは、日本政府の在外コリアンたちに対する措置を何らの抵抗もなくそのまま受け入れた韓国政府の消極的姿勢に対しても批判的である。韓国政府は、サハリン朝鮮人がその保有資格を有する韓国国籍はもちろん、彼ら／彼女らの利益も積極的に保障・保護すべきだったとノは主張する。またノは、日本の金融機関が管理しているはずのサハリン朝鮮人の貯金問題についても言及している[(104)]。

2002年にイ・ソンファンの論文[(105)]が発表された。イは日本、ロシアそしてアメリカの資料を論拠として引用し、サハリン朝鮮人の全体像を概観した。イはサハリン朝鮮人問題に解決のピリオドを打つのはまだ早いという結論を下している。

韓国の研究者たちは、韓国へ帰国した朝鮮人の共同体(安山市など)でフィールドワークをしながら分析する手法で多くの研究を遂行した。このテーマに最初に関心を示したのは民族誌学者と民族学者たちであった。チェ・キルソン(崔吉城)は数編の論文[(106)]と単行

(103) 노영돈「사할린 한인에 대한 일본의 책임」『교포정책자료』제35집、서울: 해외교포문제연구소、1990년、35–41쪽〔ノ・ヨンドン「サハリン韓人に対する日本の責任」『同胞政策資料』第35集、海外同胞問題研究所、1990年、35–41頁〕; ———「사할린 한인의 귀환문제에 관하여」『인도법논총』제10–11집、1991년、219–236쪽〔「サハリン韓人の帰還問題に関して」『人道法論叢』第10–11集、1991年、219–236頁〕; ———「사할린 한인에 관한 법적 제문제」『국제법학회논총』제37-2집、1992년123–144쪽.〔「サハリン韓人に関する法的諸問題」『国際法学会論叢』第37-2集、1992年、123–144頁〕

(104) 노영돈「사할린한인 우편저금 등 보상청구소송」『한민족공동체』제16집、2008년、60–76쪽.〔ノ・ヨンドン「サハリン韓人郵便貯金等補償請求訴訟」『韓民族共同体』第16集、2008年、60–76頁〕

(105) 이성환「사할린 한인 문제에 관한 서론적 고찰」『국제학논총』제7(12)집、2002년、215–231쪽.〔イ・ソンファン「サハリン韓人問題に関する序論的考察」『国際学論叢』第7(12)集、2002年、215–231頁〕

(106) 최길성「한인의 사할린 이주와 문화변용」『동북아문화연구』제1집、2001년、243–271쪽〔崔吉城「韓人の

本[107]を出版した。チェは、自らの諸論文の中で、苦役としての移住、強制動員、叶わぬ引揚げと母国への渡航禁止といった歴史を分析し、言語的同化、日常生活、結婚、ソ連の崩壊とそれによる政治的変化、サハリン朝鮮人と韓国人たちとの出会いなどを調査した。サハリン朝鮮人史に関心をもったチェは、民族学者イ・スンヒョンが行なったサハリン第一世代を調査対象とした韓国での生活に対する満足度および帰国問題に対するサハリンの人々の姿勢についての莫大な量のインタビューを編集して出版した[108]。

民族誌学者や民族学者のほか、社会学者もサハリン朝鮮人第一世代の研究に関心を示した。2000年にチョン・グンシクはヨム・ミギョンと共に共同で論文を執筆した[109]。この論文で両者は、母国が植民地となり、さらに冷戦を経て形成されたサハリンの朝鮮人ディアスポラが持つ団結性に加え、ソ連の政策のために現状のアイデンティティに到達したサハリン朝鮮人社会が今やもう原点に「回帰」できない事実を指摘した。

2000年に「赤十字」の要請により、安山市にいるサハリン朝鮮人帰国者の生活に対する調査が実施され、報告書が出版された[110]。この報告書の作成者たちは生活条件、韓国に対

サハリン移住と文化変容」『東北亜文化研究』第1集、2001年、243–271頁〕；同前「사할린 동포의 민족간 결혼과 정체성」『비교민속학』제19집、2000년、103–123쪽.〔「サハリン同胞の民族間の結婚とアイデンティティ」『比較民俗学』第19集、2000年、103–123頁〕

(107) 최길성『사할린: 유형과 기민의 땅』서울: 민속원、2003년.〔崔吉城『サハリン：流刑と棄民の土地』民俗院、2003年〕

(108) 이순형『사할린귀환자』서울: 서울대출판부、2004년.〔イ・スンヒョン『サハリン帰還者』ソウル大出版部、2004年〕

(109) 정근식、염미경「디아스포라, 귀환, 출현적 정체성: 사할린한인의 역사적 경험」『재외한인연구』제9집、2000년、237–280쪽.〔チョン・グンシク、ヨム・ミギョン「ディアスポラ、帰還、出現的アイデンティティ：サハリン韓人の歴史的経験」『在外韓人研究』第9集、2000年、237–280頁〕

(110) 최종혁、한동우『사할린 귀환동포 생활실태조사』용인: 강남대학교、2001년〔チェ・ジョンヒョク、ハン・ドンウ『サハリン帰還同胞の生活実態調査』江南大学校、2001年〕；황정태『사할린 귀환동포의 생활적응 과정에 관한 연구: 석사학위논문』용인: 강남대학교、2002년〔ファン・チョンテ『サハリン帰還同胞の生活適応過程に関する研究　修士学位論文』江南大学校、2002年〕；호경임『사할린 귀환동포의 생활만족 결정요인에 관한 연구: 석사학위논문』용인: 간남대학교、2002년〔ホ・ギョンイム『サハリン帰還同胞の生活満足の決定要因に関する研究　修士学位論文』江南大学校、2002年〕；배상우『사할린영주귀국 시설노인의 생활실태 및 만족도에 대한 연구: 석사학위논문』대구: 대구대학교、2006년〔ペ・サンウ『サハリン永住帰国の施設老人の生活実態及び満足度に関する研究　修士学位論文』大邱大学校、2006年〕；정천수『사할린영주귀국동포 생활상 및 사회복지 지원실태에 관한 연구: 안산고향마을을 중심으로: 석사학위논문』금산군: 중부대학교、2007년〔チョン・チョンス『サハリン永住帰国同胞の生活性と社会福祉支援実態に関する研究：安山のコヒャン・マウルを中心に　修士学位論文』中部大学校、2007年〕；김주자『사할린 귀환동포의 생활적응 실태 연구：노인시설 거주자를 중심으로: 석사학위논문』용인: 단국대학교、2007년〔キム・ジュジャ『サハリン帰還同胞の生活適応実態研究：老人施設の居住者を中心に　修士学位論文』檀国大学校、2007年〕；장세철「사할린 영주귀국자들의 생활실태: 안산시의 영주 귀국한1세 독신노인을 중심으로」『인문사회과학연구』제3집、2003년、127–143쪽〔チャン・セチョル「サハリン永住国者たちの生活実態：安山市の永住帰国した一世の独身老人を中心に」『人文社会科学研究』第3集、2003年、127–143頁〕；나형욱「사할린 영주귀국 동포 정착실태에 관한연구」『외동포와 다문화: 2009년 재외한인학회・세계한상문화연구단 공동학술대회자료집』2009년、109–137쪽〔ナ・ヒョンウク「サハリン永住国同胞の定着実態に関する研究」『海外同胞と多文化：2009年　在外韓人学会・世

する帰国者の態度、移住条件に対する満足度、新しい環境への適応などを調査した。この調査研究は、韓国のサハリン朝鮮人ディアスポラの生活を改善するのに大きく寄与し、重要な学術的情報源となってきたし、今後もそうなるであろう。

キム・ソンジョン(111)とチョ・ジョンナム(112)はサハリン朝鮮人に対するソ連、ロシア、日本、北朝鮮、そして韓国の政策を分析し論文を発表した。両者は、サハリンの朝鮮人コミュニティに対する北朝鮮の態度を詳細に記述しつつ、朝鮮人ディアスポラ形成の特性、3つの異なる朝鮮人集団、その集団間の関係と対立などを論じている。また、チョ・ジョンナムはサハリンでの有名な事件、すなわちサハリン朝鮮人ディアスポラの熱烈な分子たちによって設立され、暫く存在した「韓国共産党」を独自の観点で解釈した。

最近発表された諸研究の中では延世大学校のテン・オクサーナの修士学位論文が興味深い(113)。テンは同論文でサハリン朝鮮人のアイデンティティをウズベキスタン高麗人ディアスポラのアイデンティティと比較し調査・分析を行った。

サハリン朝鮮人の回想をオーラル・ヒストリーとして扱う研究者たちがいる。ハン・ギョング(114)、イ・ウンスクとキム・イルリム(115)、パク・スンイ(116)などの諸研究は文書館に

界韓商文化研究団　共同学術大会資料集』2009年、109–137頁〕；김인성「사할린 한인의 한국으로의 재이주와 정착분석：제도 및 운용실태를 중심으로」『재외한인연구』제24집、2011년、279–301쪽〔キム・インソン「サハリン韓人の韓国への再移住と定着の分析：制度及び運用実態を中心に」『在外韓人研究』第24集、2011年、279–301頁〕；배수한「영주귀국 사할린동포의 거주살태와 개선방향：부산 정관 신도시 이주자 중심으로」『국제정치연구』제13(2)집、2010년、279–308쪽.〔ペ・スハン「永住帰国のサハリン同胞の居住実態と改善方向：釜山鼎冠新都市の移住者を中心に」『国際政治研究』第13(2)集、2010年、279–308頁〕

(111) 김성종「사할린 한인들동포 귀환과 정착의 정책과제」『한국동북아논총』제40집、2006년、195–218쪽〔キム・ソンジョン「サハリン韓人同胞の帰還と定着の政策課題」『韓国東北亜論叢』第40集、2006年、195–218頁〕；同前「사할린 한인동포 귀환의 정책의제화 과정 연구」『한국동북아논총』제50집、2009년、309–329쪽〔同前「サハリン韓人同胞帰還の政策議題化過程の研究」『韓国東北亜論叢』第50集、2009年、309–329頁〕；同前「정책옹호연합모형을 통한 정책변동과정 분석：사할린 동포 연주 귀국 사례」『한국동북아논총』제53집、2009년、309–334쪽.〔「政策擁護連合モデルを通じた政策変動過程の分析：サハリン同胞永住帰国の事例」『韓国東北亜論叢』第53集、2009年、309–334頁〕

(112) 조정남「북한의 사할린 한인정책」『민족연구』제8집、2002년、187–197쪽.〔チョ・ジョンナム「北朝鮮のサハリン韓人政策」『民族研究』第8集、2002年、187–197頁〕

(113) 텐 옥사나『러시아 사할린한인의 민족정체성：우즈베키스탄 고려인과의 비교를 중심으로：석사학위논문』서울：연세대학교、2011년.〔テン・オクサーナ『ロシア・サハリン韓人の民族アイデンティティ：ウズベキスタンの高麗人との比較を中心に　修士学位論文』延世大学校、2011年〕

(114) 한경구「일본인의 전쟁과 죽음의 기억：신화로서의 사할린. 마오카 우편전화국 여성 전화교환수 집단자살 사건과 국제이해 교육」『사회과학연구』제21집、2008년、23–48쪽.〔ハン・ギョング「日本人の戦争と死の記憶：神話としてのサハリン 真岡郵便電話局女性電話交換手集団自殺事件と国際理解教育」『社会科学研究』第21集、2008年、23–48頁〕

(115) 이은숙、김일림「사할린 한인의 이주와 사회문화적 정체성：구술자료를 중심으로」『역사문화지리』제20-1집、2008년、19–33쪽.〔イ・ウンスク、キム・イルリム「サハリン韓人の移住と社会文化的アイデンティティ：口述資料を中心に」『歴史文化地理』第20-1集、2008年、19–33頁〕

(116) 박승의「사할린 한인동포 제2세. 우리는 누구인가」『지역사회』제47집、2004년、115–129쪽.〔パク・スンイ「サハリン韓人同胞第2世：我々は誰なのか」『地域社会』第47集、2004年、115–129頁〕

は記録が無く、ただ当事者の記憶にだけ残っている事件を叙述している。

ハン・ヘイン(韓恵仁)の研究は重要な意味を持つ(117)。ハンは、日本とロシアの文書館の資料、サハリンで収集した現地調査資料などを利用し、(一般にはそう思われていたものの実際には全てのサハリン朝鮮人が該当するわけではない)強制動員の歴史および各歴史的段階でサハリン朝鮮人ディアスポラと関連のある各国の政策を研究することで、問題を充分に客観的に叙述することに成功している。

イ・ジェヒョクは人口社会学と地理学の観点からサハリン朝鮮人ディアスポラの特徴を研究した(118)。イは朝鮮人の移住と居住の性格を分析し、人口学的なスパンで共同体内の歴史的、政治的状況を研究している。

日本植民地統治の強制動員の歴史については、韓国の研究者たちの間に分離した層が形成されている。この問題に対する最初の研究としては、キム・ミニョンの論文(119)と現地調査結果に基づいて作成され「国立民俗博物館」から刊行された論文集がある(120)。これら研究者は強制動員に関する(日本語に翻訳されたロシアの文書を含めて)数多くの資料を収集したが、提示した学問的結論と現実的提案はかなり説得力に欠ける。

キム・スンイルは強制動員の歴史を分析しつつ、日本政府を相手に補償を要求するには

(117) 한혜인「사할린 한인 귀환을 둘러싼 배제와 포섭의 정치: 해방후~1970년대까지의 사할린 한인 귀환 움직임을 중심으로」『사학연구』제102집、2011년、157–198쪽〔ハン・ヘイン「サハリン韓人帰還をめぐる排除と包摂の政治：解放後～1970年代までのサハリン韓人帰還の動きを中心に」『史学研究』第102集、2011年、157–198頁〕;同前「「조선인강제연행」에서의 강제성의 한 단면: 홋카이도탄광 기선주식회사를 중심으로」『일본어문학』제10집、2001년、265–293쪽〔「「朝鮮人強制連行」における強制性の一断面：北海道炭鉱汽船株式会社を中心に」『日本語文学』第10集、2001年、265–293頁〕;同前「전시기(戦時期) 조선인 강제연행의 경로：강제연행 정책수립의 과정을 중심으로」『한일군사문화학회』제5집、2007년、149–171쪽〔「戦時期の朝鮮人強制連行の経路：強制連行政策樹立の過程を中心に」『韓日軍事文化学会』第5集、2007年、149–171頁〕;同前「코리안 디아스포라로서의 사할린여성: 착종된 고향、화태의 기억」심포지움 '코리안 디아스포라: 젠더、계급、민족'、서울: 서울대학교、2007년11월3일~4일、2007년、1–9쪽〔「コリアン・ディアスポラとしてのサハリン女性：錯綜する故郷、樺太の記憶」、シンポジウム「コリアン・ディアスポラ：ジェンダー、階級、民族」、ソウル大学校、2007年11月3–4日、2007年、1–9頁〕;同前「노동력 동원에 있어서 식민지 지배 '폭행'선」『중국인 강제여행』제6집、2002년、1–9쪽.〔「労働力動員における植民地支配「暴行」線」『中国人の強制旅行』第6集、2002年、1–9頁〕

(118) 이재혁『러시아 사할린 한인인구의 형성과 발달: 박사학위논문』서울: 경희대학교、2010년〔イ・ジェヒョク『ロシア・サハリン韓人人口の形成と発達　博士学位論文』慶熙大学校、2010年〕;同前「러시아 사할린 한인이주의 특성과 인구발달」『국토지리학회지』제2(44)집、2010년、181–198쪽〔「ロシア・サハリン韓人移住の特性と人口発達」『国土地理学会誌』第2(44)集、2010年、181–198頁〕;同前「일제강점기 사할린의 한인이주」『시베리아연구』제1(15)집、2011년、85–135쪽.〔「日帝強占期のサハリン韓人移住」『シベリア研究』第1(15)集、2011年、85–135頁〕

(119) 김민영「사할린 한인의 이주와 노동、1939–1945」『국제지역연구』제1(4)집、2000년、23–52쪽.〔キム・ミニョン「サハリン韓人の移動と労働、1939–1945」『国際地域研究』第1(4)集、2000年、23–52頁〕

(120) 국립민속반물관『러시아 사할린、연해주 한인동포의 생활문화』서울: 국립민속반물관、2001년.〔『ロシア・サハリン、沿海州の韓人同胞の生活文化』国立民俗博物館、2001年〕

強制動員された彼ら／彼女らに関する正確な統計資料、問題に対する全方位的な分析、さらにサハリン朝鮮人問題に対する共同研究などが必要であるという結論を提示した[121]。この問題に対する新しい観点を提示した研究者としては、強制動員に関する広範囲な資料(インタビュー、人名録、文書など)を収集し概括したチョン・ヘギョン(鄭惠瓊)の研究[122]と研究プロジェクトによって瑞穂・上敷香の両村で起きた朝鮮人虐殺事件を研究したパン・イルグォン[123]が挙げられる。イ・ヴォンヨンも自著でこの悲劇的事件を扱っている[124]。パンはサハリン朝鮮人史の研究史検討に関する論文も発表している[125]。

強制動員に関する重要な研究の一つとしてキム・ミョンファンの研究が挙げられる[126]。キムは動員された主要な場所、労働者たちの労働条件、死亡率、朝鮮人の虐殺事例、また帰国問題の歴史などを分析している。

高麗大学校韓国史学科で発表されたイ・サンヴォンの修士学位論文は、サハリン朝鮮人たちの帰国運動史に関する研究である[127]。イは、ロシアと韓国の資料に基づいて母国に帰ろうとするサハリン朝鮮人たちの苦闘を分析しサハリン朝鮮人コミュニティに影響を与えた内部的(ソ連社会への統合過程)および外部的(北朝鮮の宣伝、大韓民国への帰国運動)

(121) 김승일「사할린 한인 미귀환 문제의 역사적 접근과 제언」『한국근현대사연구』제38집、2006년、185–225쪽.〔キム・スンイル「サハリン韓人の未帰還問題の歴史的アプローチと提言」『韓国近現代史研究』第38集、2006年、185–225頁〕

(122) 정혜경「1944년에 본토로 '전환배치'된 사할린(화태)의 조선인 광부」『한일민족문제연구』제14집、2008년、5–73 쪽〔チョン・ヘギョン「1944年に本土に「転換配置」されたサハリン(樺太)の朝鮮人鉱夫」『韓日民族問題研究』第14集、2008年、5–73頁〕; 同前「전시체제기 화태 전환배치 조선인 노무자 관련 명부의 미시적 분석」『숭실사학』제22집、2009년、155–182쪽〔「戦時体制期樺太の転換配置の朝鮮人労務者関連名簿の微視的分析」『崇実史学』第22集、2009年、155–182頁〕; 同前『지독한 이별: 1944년、에스토르(恵須取)』서울: 선인、2010년.〔『無残な別れ：1944年、恵須取』ソニン、2010年〕

(123) 방일권(연구책임자)『사할린 가미시스카(上敷香)조선인 학살사건 진상조사』서울: 일제강점하강제동원피해진상규명위원회、2007년〔パン・イルグォン(研究責任者)『サハリンの上敷香の朝鮮人虐殺事件の真相調査』日帝強占下強制動員被害真相究明委員会、2007年〕; 同前『사할린 미즈호(瑞穂)조선인 학살사건 진상조사』서울: 일제강점하강제동원피해진상규명위원회、2008년.〔『サハリンの瑞穂の朝鮮人虐殺事件の真相調査』日帝強占下強制動員被害真相究明委員会、2008年〕

(124) 이원용『사할린 가미시스카 한인학살사건I』서울: 북코리아、2009년.〔イ・ヴォンヨン『サハリンの上敷香の韓人虐殺事件I』ブックコリア、2009年〕

(125) 방일권「한국과 러시아의 사할린 한인 연구：연구사의 검토」『동북아역사논총』제38(12)집、2012년、363–413쪽.〔パン・イルグォン「韓国とロシアのサハリン韓人研究：研究史の検討」『東北亜歴史論叢』第38(12)集、2012年、363–413頁〕

(126) 김명환『사할린 강제동원 조선인들의 실태 및 귀환』들서울: 대일항쟁기강제동원피해조사및 국외강제동원희생자등 지원위원회간、2011년.〔キム・ミョンファン『サハリン強制動員の朝鮮人の実態及び帰還』対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会刊、2011年〕

(127) 이상원『해방 이후(1945–1977)사할린 한인의 정착과정과 귀환운동:석가학위논문』서울: 고려대학교、2014년.〔イ・サンヴォン『開放以降(1945–1977)サハリン韓人の定着過程と帰還運動：修士学位論文』高麗大学校、2014年〕

要素を検討した。イは、ソ連の民族政策によって朝鮮人たちがソ連での生活に適応し始め、1970年代中盤になると、すでに大部分の朝鮮人は高い代価を払ってまで韓国に戻ることを望んではいなかったと結論づけた。

2011年には、サハリン朝鮮人の強制動員に関する『強制動員を語る』という韓国の研究者たちによる書籍が出版された(128)。この主題がいまだに痛々しい問題として残り、これからも韓国の研究者たちの関心を惹き続けるであろうことを物語っている。

チェ・サングの『サハリン：凍りついた島に根づいた朝鮮人の歴史と暮らしの記録』という研究書が2015年に刊行された(129)。この研究書は、韓国市民団体である地球村同胞連帯(KIN:Korean International Network)(130)の一員たちとともに現地で収集した調査資料に基づいている。同書は3部から構成されている。第1部は著者のサハリン訪問、第2部はサハリン朝鮮人たちの語りによるサハリン朝鮮人史、苦難と複雑さに満ちた人生の旅路についての歴史を扱っている。最後の第3部では、サハリン朝鮮人たちの市民権問題について韓国の法廷で勝訴し帰国した婦人たちと社会運動家たちの歴史を提示している。同情と憐憫をもって執筆されたチェの同書は、間違いなくサハリン朝鮮人史研究に大きな貢献を与えたと言える。

4. 英語の資料と研究史

サハリン朝鮮人史に関する英文資料はワシントン(コロンビア特別区)に所在するNARA(米国国立文書記録管理庁、National Archives and Records Administration)に所蔵されている。NARAのサハリン朝鮮人関連資料は、米国がサハリン朝鮮人たちの人生に直接関与した時期、つまり戦後引揚げが実現しなかった時期に関連するものである。同資料は1945年10月2日に設置され、1952年4月28日まで存在していたSCAP(連合国総司令部、General Headquarters Supreme Commander for Allied Powers)の文書と記録である(131)。同資料にはサハリン朝鮮人たちの送還要求に対してSCAPに質疑したこととその質疑に対するSCAPの答弁、また参謀部で行われていた議論とその問題を解決するために米国司令部が採択した決定などに関する文書などが含まれている。この文書の一部は韓国の研究者たちによって資料集として刊行されている(132)。

(128) 정혜경、심재욱、오일환、김명환、北原道子、김남영『강제동원을 말한다. 1. 이름만 남은 절규: 명부편』서울:선인、2011년.〔チョン・ヘギョン、シム・ジェウク、キム・ミョンファン、北原道子、キム・ナミョン『強制動員を語る1. 名ばかりという絶叫：名簿編』ソニン、2011年〕

(129) 최상구『사할린: 얼어붙은 섬에 뿌리내린 한인의 역사와 삶의 기록』서울: 미다어 일다、2015년.〔チェ・サング『サハリン　凍りついた島に根づいた朝鮮人の歴史と暮らしの記録』ソウル：ミディオイルタ、2015年〕

(130) 地球村同胞連帯は韓国以外の地域、特に日本、サハリン、そして旧CISに住んでいるコリアン・ディアスポラと密接に連携している韓国の有名な市民団体である。

(131) National Archives and Records Administration, “Military Agency Records RG 331.”

(132) 장석홍「사할린지역 한인 귀환」『한국근현대사연구』제43집、2007년、210–275쪽.〔チャン・ソクフン「サ

英語圏の学術界においてサハリン朝鮮人史を研究する研究者はごく少数である。筆者が欧米の文献として把握することができたサハリン朝鮮人ディアスポラと関連する研究成果は、研究書における文脈上での言及、一部の論文における若干の言及、そして修士学位論文1篇だけであった。このような学術的研究の幅の狭さの背景は、長期にわたるソ連自体とソ連の文書館の閉鎖性および学問の中心から離れたサハリンの地理的位置である。

サハリンの歴史に関心を持っていた最初の優れた西欧(米国)の研究者はジョン・ステファンであった。1971年にステファンはサハリン史を著述し(133)、後に同書はロシア語にも翻訳され、学術誌『郷土誌ビュレティン』に掲載された(134)。ステファンは英語、ロシア語そして日本語の資料と文献を幅広く利用し、古代から20世紀までのサハリンの歴史を詳細かつ徹底的に叙述した。同書では、サハリンの地理と歴史はもちろん、中国の最初の探査隊の到着、サハリンをめぐる日露間の角逐、ツァーリ体制による統治の歴史、日本統治期の歴史、ソ連統治下の北サハリンの歴史、20世紀中盤以後のサハリンの歴史などが叙述されている。同書のかなりの部分でサハリン朝鮮人の歴史についても言及されている。特に、ステファンは日本統治下での朝鮮人の地位、1945年8・9月の日ソ戦争時の住民たちの状況、戦後期のサハリン朝鮮人コミュニティが直面した諸問題を叙述している。

ステファンの著書には事実関係が正確でない点がある。例えば、ステファンはサハリン朝鮮人の人口は1945年に15万人だったが、戦中から引揚げ実施期にかけて10万人の朝鮮人がサハリンを離れ、残りの5万人だけがサハリン州に残ったと述べている。現在では、閲覧可能な文書館資料からこの数値は明らかに何倍も誇張されたものであると言える。しかし、西側の学術界においてサハリン史とサハリン朝鮮人史の解明のためにステファンの研究が及ぼした影響の大きさには疑いの余地がない。

サハリン朝鮮人に関心を示した米国の研究者としてジョージ・ギンズブルグスも挙げることができる。ギンズブルグスは、ソ連内の北朝鮮人移住労働者に関する論文(135)と著書『ソビエト連邦の市民権に関する法律』(136)において、サハリン朝鮮人史にかなりの紙幅を割いている。ギンズブルグスは前記論文で北朝鮮労働者たちの募集過程およびカムチャツカ、サハリン、クリル諸島での労働条件をソ連労働法と管理法の観点から論じた。ギンズブルグスは前掲書で1948年の市民権に関する法律を分析し、サハリン朝鮮人たちの市民権

ハリン地域の韓人帰還」『韓国近現代史研究』第43集、2007年、210–275頁〕

(133) John Stephan, *Sakhalin: A History* (Oxford: Clarendon Press, 1971).

(134) Стефан Дж. Сахалин. История // Краеведческий бюллетень. 1992. № 1. С. 46–48; № 2. С. 25–67; № 3. С. 65–126; № 4. С. 63–116.〔ジョン・ステファン「サハリン:歴史」『郷土誌ビュレティン』1号、1992年、46–48頁;2号、25–67頁;3号、65–126頁;4号、63–116頁〕

(135) George Ginsburgs, “Labor policy and foreign Workers: the case of North Korean Gastarbeiter in the Soviet Union,” in George Ginsburgs, Giarnmaria Ajani, Ger P. van den Berg, eds., *Soviet Administrative Law: theory and Policy* (Netherlands: Martinus Nijhoff Publishers, 1989), pp. 399–424.

(136) George Ginsburgs, *The citizenship law of the USSR* (Netherlands: Martinus Nijhoff Publishers, 1983).

問題を研究した。

2011年にデイン・リが『サハリン朝鮮人たちのアイデンティティと21世紀のコリアン・ディアスポラ内部での葛藤』という修士論文により修士号を授与された(137)。同論文はリ自身のフィールド調査資料を基に作成され、サハリン朝鮮人史の研究史上大きな価値がある。リは民族誌学、民族学および社会学的な方法論を利用し、三代にわたるサハリン朝鮮人たちのアイデンティティ、北朝鮮と韓国との関係、教会と文化センターの機能、サハリン朝鮮人の文化維持とその他の諸問題を分析した。

アナトーリー・T. クージンの英語論文(138)はあまり知られていないが、ソ連の文書館に所蔵された資料に基づき作成された数少ない研究成果の一つである。彼はこの論文において第二次大戦以後にサハリンに残され差別を受ける朝鮮人の存在や異民族間の関係の複雑さおよび戦後の引揚げ問題を論じた。

アンドレイ・ランコフはサハリンを旅行した後、学術誌『王立アジア学会韓国支部会報』に英語論文を発表した(139)。同論文は特にサハリン朝鮮人史研究の中でよく見られる決まり切った表現を使用しなかった点で興味深い。例えば、ランコフによれば、樺太の朝鮮人移住は最初の時期には(一般的には強制動員的性格が強かったと思われているのに対して)自発的な性格を有し、樺太の炭鉱の高い賃金が誘引要因だったと主張した。

韓国人が英語で発表した研究成果としては、市民権を持たないサハリン朝鮮人の引揚げ(140)および北東アジアでの朝鮮民族移住(141)に関する2篇の論文が挙げられる。前者ではサハリンの引揚げに対する韓国の政策を研究し、後者では朝鮮半島から移住したコリアンの移住史の一部分としてサハリン朝鮮人の移住史を検証している。

北海道大学所属の研究者であるスヴェトラナ・パイチャゼとフィリップ・A. シートンが編者を務め出版社ルートリッジから2015年に論文集が出版されたことは、サハリン史の研究史において大きな出来事だった(ジョン・ステファンの著作以降に最初に発表された英米の文献のため)。『樺太／サハリン：変動する日露国境からの声』(142)は西欧でよくみられ

(137) Dayne Lee, *Sakhalin Korean Identity & Engagement in the 21st Century Korean Diaspora*, senior thesis (Claremout: Pomona College, 2011).

(138) Anatolii Kuzin, "The Former Japanese Citizens in the Post-war Soviet Control System on Southern Sakhalin (1945–1947)," *Power and Administration in the East of Russia* (Khabarovsk, no. 3, 2010), pp. 82–88.

(139) Andrei Lankov, "Forgotten people: The Koreans of Sakhalin Island, 1945–1991," *Transactions of Royal Asiatic Society – Korean Branch*, no. 85 (2010), pp. 13–28.

(140) Il Chee Chong, "*Repatriation of Stateless Koreans from Sakhalin Island*," *Korea and World Affairs* 11, no. 4 (1987), pp. 708–743.

(141) Jeanyoung Lee, "Ethnic Korean Migration Northeast Asia," *Proceedings of International Seminar: Humans flow across National Borders in Northeast Asia* (Monterey: Monterey Institute of International Studies, 2002), pp. 118–140.

(142) Svetlana Paichadze, Philip A. Seaton eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto/ Sakhalin* (London and New York: Routledge), 2015.

る共同執筆という形式で作られた論文集である。この形式の研究書は、各章や各節をそれぞれの研究者が執筆するが、各主題、概念、目次、序論は編者によって構想が練られており、明確に規定された研究対象に対する多様な諸観点を確保し、研究対象を国籍が異なる著者たちの見解に立脚して検証できるようにしている。

同書の全11章のうち4章がサハリン朝鮮人史に関するものだが、その中でも自身の著書の内容を要約して紹介した中山の研究(143)が特に着目に値する。

玄武岩とスヴェトラナ・パイチャゼが執筆した章(144)では、第二次大戦以後サハリンに残らざるを得なかった女性たちの問題が扱われている。朝鮮人男性と結婚した日本人女性たちは、自分の子どもたちとともに朝鮮人共同体に吸収された。また朝鮮人たちが養子にした日本人の子どもたちも朝鮮人共同体に取りこまれていた。彼ら／彼女らはみな朝鮮式の姓名を与えられ、朝鮮学校に通い朝鮮語を習う中で、彼ら／彼女らの間に多文化的アイデンティティが形成された。冷戦以後、そしてロシア、日本、韓国の間で帰国問題の合意書が締結されて以降、彼ら／彼女らも歴史的母国に帰国することが可能になった。しかし、彼ら／彼女らが多文化的家族を形成したにもかかわらず帰国事業は単一民族国家によって行われた。結局、家族の一部はサハリンに残り、一部は韓国へ、また一部は日本へ帰国するという場合が少なくなかった。国境線が彼ら／彼女らの間を通って離散家族を作り出している。

イゴリ・R. サヴェリエフが執筆した章(145)は、極東での国境線の形成という観点から朝鮮人のサハリン移住を扱っている。国境の形成と再形成は多様な民族集団および該当地域に居住している隣人同士の相互関係に大きな影響を与えた。シベリア鉄道建設がロシア帝国内の諸民族の移住を促し多民族状況が構成された沿海地方とは異なり、サハリンは1945年までロシア帝国とソ連にとって遠い辺境としてとり残されており、ロシアからよりも日本からの強い影響力を受けていた。特にサヴェリエフは、樺太の石炭産業のために人的資源の需要が高まった時期にサハリン朝鮮人の人口が急速に増加したという事実を強調している。サハリンへの朝鮮人の強制移住は、サハリンも経験した植民地発展の影の部分であった。

同書には2000年代初めに韓国を訪問したことのある二世と三世のサハリン朝鮮人に関する筆者による論文も収録されている(146)。不慣れな韓国社会の現実に直面し、その社会へ

(143) Taisho Nakayama, “Japanese society on Karafuto,” in Paichadze, Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border*, pp. 19–41.

(144) Mooam Hyun, Svetlana Paichadze, “Multi-layered identities of returnees in their ‘historical homeland’: returnees from Sakhalin,” in Paichadze, Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border*, pp. 195–211.

(145) Igor R. Saveliev, “Borders, Borderlands and Migration in Sakhalin and the Priamur Region: a Comparative Study,” in Paichadze, Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border*, pp. 42–60.

(146) Yulia Din, “Dreams of returning to the homeland: Koreans in Karafuto and Sakhalin,” in Paichadze, Seaton, eds., *Voices from the Shifting Russo-Japanese Border*, pp. 177–194.

の同化が現実的に不可能だと認識した上で、これらの世代はサハリンに戻る道を選んだと筆者は論じた。

おわりに

サハリン朝鮮人史の研究史の検討から、次のような結論に到達することができる。サハリン朝鮮人史研究については、研究がかなり進み、多くの学術的研究業績が蓄積されている。文書館に所蔵されている文書や口述資料、回顧録と回想記、新聞資料、個人的証言などのような多様な種類の資料が引用されている。しかし、ロシア語、日本語、韓国語、そして数は少ないものの英語といった諸言語によって重要な業績が蓄積されてきたにもかかわらず、サハリン朝鮮人史の究明には大きな空白が存在する。

いまだにロシア、韓国、日本そしてアメリカの文書館に所蔵されている資料と文献に対して総合的研究がなされていない。サハリン朝鮮人の問題は国際問題として高度な政治的関心を幾度となく集めてきたことを考えると、このような研究史上の空白はサハリン朝鮮人史研究の本質的問題である。

これまで研究者たちは自国の研究と資料に依存してきた。しかし、サハリン朝鮮人史に関してロシア、日本そして韓国の莫大な文献と資料を総合的に引用した研究成果は実質的にはほとんど存在しない。

さらには、サハリン朝鮮人史全般に対する研究でさえ、ディアスポラを完全な社会政治的現象、単一の社会有機性を持つものとして論じてこなかった。例えば、最も総合的なものと思われるクージンの研究もサハリン朝鮮人史を歴史的に多様な時期に定住した「群としての朝鮮人」の歴史（история «корейских масс»）として扱っている。

サハリン朝鮮人史研究はその完結にはまだまだほど遠い。それだけに多くの研究者の関心が必要である。筆者は本テーマが学術的研究に寄与し、専門家はもちろん、筆者の研究が一般読者にとっても興味深いものになることを願う。

監修者補足

2015年の原著刊行以降も、サハリン朝鮮人史に関する研究は各言語で発表されている。以下では主要なものを列記しておく。韓国語文献のうち2019年までのものについては、以下の一覧にある韓恵仁論文に詳しいので省略し、2020年以降に発表されたものについては同論文著者から新たに情報提供を得た。この場を借りて感謝を申し上げる。また、本稿でディンは、露日韓英以外の言語でのサハリン朝鮮人史研究を見つけることができなかったと記しているが、原著発刊同年にはごく短いものの中国語でもサハリン朝鮮人史研究に関する文章が発表されているので以下に挙げておいた。なお、以下に挙げている文献名にお

いては、表記言語間の対応をわかりやすくするため人名は表記言語によらず、氏／姓・名(・父姓)の順に統一してある。

Ким Ен Хи, Черпакова Кира Я., Сахалинские корейцы. Каталог коллекций из собрания Сахалинского областного краеведческого музея (1945–2018 гг.). Воронеж: ООО "Фаворит", 2018〔キム・イェンヒ、チェルパコーワ・キーラ・Ya.『サハリン朝鮮人：サハリン州郷土博物館収集コレクション目録(1945 ～ 2018年)』〕.

Пак Сын Ы, Сахалинские корейцы в поисках идентификации: монография. Москва: Издательство «Перо», 2019〔パク・スンイ『アイデンティティ模索の中のサハリン朝鮮人』〕.

Крюков Дмитрий Н., Десять лет на Северном Сахалине: 1935–1944 гг. [В 2 кн.]. Кн. 1. Южно-Сахалинск: ОАО «Сахалинская областная типография», 2021〔クリューコフ・ドミートリー・N.『北サハリンの10年間：1935~1944』第1巻〕.

Дин Юлия И., Исследование современных русскоязычных корейцев 13: Сахалин: территория принудительной мобилизации. Сеул: Сонин, 2022〔ディン・ユリア『現代ロシア語圏のコリアン研究13　サハリン：強制連行の領土』〕.

中山大将「サハリン韓人の下からの共生の模索」『境界研究』5号、2015年(https://doi.org/10.14943/jbr.5.1)。

玄武岩、パイチャゼ・スヴェトラナ、後藤悠樹『サハリン残留：日ロ韓　百年にわたる家族の物語』高文研、2016年。

中山大将「樺太のエスニック・マイノリティと農林資源：日本領サハリン島南部多数エスニック社会の農業社会史研究」『北海道・東北史研究』11号、2018年。

中山大将『サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史』国際書院、2019年。

李羲八、長澤秀『遺言：「樺太帰還在日韓国人会」会長、李羲八が伝えたいこと』三一書房、2019年。

韓恵仁「韓国におけるサハリン関連研究状況と関連史料について」『北方人文研究』13号、2020年(http://hdl.handle.net/2115/77248)。

高橋孝治「日本領樺太における公訴時効制度の考察」『日本學研究』(韓国檀国大学日本研究所) 62号、2021年。

城渚紗「外務省記録に見る『樺太残留者帰還請求訴訟』」『アジア地域文化研究』17号、2021年(https://doi.org/10.15083/0002002875)。

ランブレクト・ニコラス「終わりなき旅の物語としての引揚げ文学：李恢成の初期作品における『引揚性』をめぐって」蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる：交錯する国境、人

の移動、アイデンティティ』みずき書林、2022年。

오일환「박노학의 생애와 사할린한인 귀환운동에 관한 연구」『韓日民族問題研究』Vol. 38、2020년〔呉日煥(OH Il-Hwan)「朴魯学の生涯とサハリン韓人帰還運動に関する研究」『韓日民族問題研究』〕。

지충남「지방자치단체의 귀환동포 조례제정과 지원 실태:CIS 고려인과 사할린한인을 중심으로」『한국과 국제사회』Vol. 4. No. 5、2020년〔池忠楠(JI Choong-Nam)「地方自治団体の帰還同胞条例制定と支援実態：CIS高麗人とサハリン韓人を中心に」『韓国と国際社会』〕。

임성숙「사할린 한인의 영주귀국과 새로운 경계의 형성과정」『한림일본학 』No. 38、2021년〔林聖淑 (LIM Sung-Sook)「サハリン韓人の永住帰国と新しい境界の形成過程」『翰林日本學』〕。

김연식「영주귀국 과정에서 드러난 사할린 한인 1세대의 고국지향성 연구：<귀향 그리고 또 다른 이별>의 촬영자료를 중심으로」『일본근대학연구』No. 71、2021년〔金淵植 (KIM Yeon-Shik)「永住帰国過程で明らかになったサハリン韓人第一世代の故国志向性研究：〈帰郷ともう一つの別れ〉の撮影資料を中心に」『日本近代学研究』〕。

윤향희「사할린동포의 디아스포라: 충남 아산지역을 중심으로」『인문사회 21』Vol. 12. No. 2、2021년〔尹鄕熙(YUN Hyang-Hee)「サハリン同胞のディアスポラ：忠南牙山地域を中心に」『人文社会21』〕。

최희식「도의적 책임론의 등장과 의미:사할린 한인문제를 중심으로」『한국정치연구』Vol. 30. No. 1、2021년〔崔喜植(CHOI Hee-Sik)「道義的責任論の登場と意味：サハリン韓人問題を中心に」『韓國政治研究』〕。

강정하、양기웅「사할린 한인 귀환 이주와 NGO의 초국경적 역할」『한국외국어대학교 동유럽발칸연구소』Vol. 45. No. 3、2021년〔姜貞河(KANG Jung-Ha)、梁基雄(YANG Ki-Woong)「サハリン韓人帰還移住とNGOの超国境の役割」『東欧・バルカン研究』〕。

배은경「1950년대 사할린 조선순회극단 연구：러시아국립문학예술문서보관소(РГАЛИ) 자료에 기초하」『한국슬라브.유라시아학회』Vol. 36. No. 2、2021년〔ベ・ウンキョン (BAE Eun-Kyung)「1950年代のサハリン朝鮮巡回劇団の研究：ロシア国立文学芸術文書保管所資料に基づいて」『スラブ学報』〕。

임경화「접경지대에 남겨진 조선어：소비에트 시대 사할린 코리언들의 언어 문제」『역사비평』No. 136、2021년〔林慶花(LIM Kyoung-Hwa)「接境地帯に残された朝鮮語：ソビエト時代のサハリン・コリアンの言語問題」『歴史批評』〕。

이준영「화태 이주 조선인에 관한 신문기사의 정량적 분석」『일본근대학연구』No. 72、2021년〔イ・ジュンヨン (LEE Jun-Young)「樺太移住朝鮮人に関する新聞記事の定量的

分析」『日本近代学研究』〕。
구본규「초국적인 사회적 장 내에서의 의료경험과 전략:귀환재사할린한인의 사례를 중심으로」『다문화와 평화』Vol. 16. No. 1、2022년〔ク・ボンギュウ(KOO Bon-Giu)「超国的社会的な場所での医療経験と戦略：帰還在サハリン韓人の事例を中心に」『多文化と平和』〕。
정혜경「대한적십자사 소장 사할린 한인 관련 문서를 통해 본 '일시모국방문'(1980 ～ 1990년대)」『한국민족운동사연구』No. 112、2022년〔鄭惠瓊(JUNG Hye-Kyung)「韓国赤十字社所蔵サハリン韓人関連文書から見た「一時母国訪問」(1980 ～ 90年代)」『韓国民族運動史研究』〕。
임성숙「사할린 한인의 영주귀국과 문화 상징으로서의 주거공간」『문화와융합』Vol. 44. No. 4、2022년〔林聖淑 (LIM Sung-Sook)「サハリン韓人の永住帰国と文化の象徴としての住居空間」『文化と融合』〕。
임성숙「사할린 한인의 시간 경험에 대한 해석」『해항도시문화교섭학』No. 26、2022년〔林聖淑 (LIM Sung-Sook)「サハリン韓人の時間経験の解釈」『海港都市文化交渉学』〕。
임성숙「포스트제국 공간속의 이동:사할린 한인과 일본인 처의 갈등」『인문사회 21』Vol. 13. No. 1、2022년〔林聖淑 (LIM Sung-Sook)「ポスト帝国空間の中の移動：サハリン韓人と日本人妻の対立」『人文社会21』〕。
임성숙「사할린 한인 영주귀국과 '어머니의 이주'를 둘러싼 일상의 담론과 상상력」『현대사회와 다문화』Vol. 12. No. 1、2022년〔林聖淑 (LIM Sung-Sook)「サハリン韓人永住帰国と「母の移住」をめぐる日常の談話と想像力」『現代社会と多文化』〕。
박희영「사할린 한인동포 귀환문제를 둘러싼시대 인식과 의미 연구：1957년～ 1970년까지의 외교문서를 중심으로」『일본근대학연구』No. 78、2022년〔パク・ヒヨン(PARK Hee-Young)「サハリン韓人同胞帰還問題をめぐる時代認識と意味研究：1957年～ 1970年までの外交文書を中心に」『日本近代学研究』〕。
구본규「의사출신 영주귀국 사할린 한인들의 생애사를 통해 본소련 시기 한인의사들의 의학교육과 진료경험」『다문화콘텐츠연구』No. 40、2022년〔ク・ボンギュウ(KOO Bon-Giu)「医師出身永住帰国サハリン韓人のライフ・ヒストリーを通じたソ連期韓人医師たちの医学教育と診療経験」『多文化コンテンツ研究』〕。

Lee Chaimun, Khvan Lyudmila Borisovna, "A Transnational Tale of Two Nationalities: Ethnic Koreans in Sakhalin Island and North Koreans in Kamchatka, Russia," 한국민족문화〔『韓国民族文化』〕, No. 74, 2020.
Paichadze Svetlana, *Identity, Language and Education of Sakhalin Japanese and Koreans: Continual Diaspora* (Cham: Springer), 2022.

金永洵、孙德俊、朴奉秀、杨彦鑫「哈林韩国人的过去与未来」『赤子』第7期、2015年〔金永洵(KIM Young-Sun)、孫德俊(SUN Dejun)、朴奉秀(PARK Bong-Su)、楊彦鑫(YANG Yanxin)「サハリン韓国人の過去と未来」＊なお、原題の「哈林」は本来「薩哈林」と表記すべき〕。

なお、朝鮮人史研究に限らず、2018年時点での日本語、ロシア語、韓国語、英語、中国語でのサハリン樺太史研究の状況については、原著者のディンや前記の韓も招聘された「サハリン樺太史研究会10周年シンポジウム　世界におけるサハリン樺太史研究」(北海道大学、2018年12月)において情報共有がなされ、『北方人文研究』13号(https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/77237)に報告論文が公開されている。